

五反田遺跡

塩山東バイパス（国道411号）建設に伴う発掘調査報告

2002. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

五反田遺跡

塩山東バイパス（国道411号）建設に伴う発掘調査報告

2002. 3

山梨県教育委員会
山梨県土木部

序 文

本報告書は、塩山東バイパス（国道411号）建設に伴って平成12・13の2箇年に渡り実施された五反田遺跡の発掘調査報告書であります。

塩山市熊野地域周辺は古くから重川が大規模な氾濫を起こし、広範囲に人々を苦しめてまいりました。しかしながら、縄文時代から近世までの数多くの遺跡が残存していることが認められているところでもあります。

さて、今回の五反田遺跡の発掘調査では古墳時代前期と平安時代の集落の一部が発見されました。古墳時代の住居跡は調査区南寄りに集中が見られるようであり土器類のセット関係が明らかとなる興味深い資料も検出されております。また、平安時代の住居跡は中央付近を中心として散在して検出され、なかには焼失住居かとも考えられるものも確認されています。

ここ数年間、塩山市内を北側から南下するように塩山東バイパス建設関連の遺跡がいくつか調査されてきました。今後これらの遺跡の内容が詳細に明らかとなることで当時の様相の一端が捉えられることとなることは間違いありません。

末筆になりますが、種々のご協力を賜りました関係各位、地元の方々並びに発掘調査と整理作業に従事していただいた方に厚く御礼申し上げます。

2002年3月

山梨県埋蔵文化財センター
所長 大塚初重

例言・凡例

1. 本報告書は平成12・13年度（2000・2001年度）に塩山東バイパス（国道411号）建設に伴い発掘調査された塩山市五反田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は山梨県土木部の委託を受けて山梨県教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査および出土品の整理は、山梨県埋蔵文化財センターで行い、齊藤伸・古屋勝之・吉岡弘樹が担当した。なお、第2章を齊藤がそれ以外を吉岡が分担執筆した。
4. 発掘調査現場における写真撮影は、齊藤・吉岡・古屋が撮影した。また、報告書作成にあたっての遺物写真撮影は齊藤・吉岡が行った。
5. 発掘調査および整理作業において、次の方々・機関よりご協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略・順不同）

塩山市教育委員会 有限会社山本製作所

猪俣喜彦 瀬田正明 望月和幸

6. 本報告書の挿図等に関する指示は下記のとおりである。
遺構・遺物の挿図縮尺は基本的に次のとおりであるが、資料などの大きさにより適宜、縮尺を変化させてある。また、これ以外のドットマークなどの指示については図中に示してある。
遺構 住居跡：1／60 土坑：1／40
遺物 土器類および拓影：1／3
7. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真等は一括して、山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。

目 次

序文

例言・凡例

第1章 調査の経緯と組織

第1節 調査にいたる経緯.....	1
第2節 調査組織.....	1

第2章 遺跡の概観

第1節 地理的環境.....	2
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境.....	2

第3章 調査方法と基本層序

第1節 調査方法.....	4
第2節 基本層序.....	7

第4章 発見された遺構と遺物

第1節 住居跡.....	9
第2節 竪穴状遺構.....	26
第3節 土坑.....	28
第4節 溝状遺構.....	33
第5節 その他の遺構.....	34

第5章 まとめ.....

42

挿図目次

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 第 1 図 遺跡地位置図 | 第22図 第16号住居跡 |
| 第 2 図 調査範囲図 | 第23図 第17号住居跡 |
| 第 3 図 基本層序観察位置図 | 第24図 第1号竪穴状遺構 |
| 第 4 図 基本層序柱状図 | 第25図 第2号竪穴状遺構 |
| 第 5 図 遺構配置図 | 第26図 第3号竪穴状遺構 |
| 第 6 図 第1号住居跡 | 第27図 第1~9号土坑 |
| 第 7 図 第2・3号住居跡 | 第28図 第10~16号土坑 |
| 第 8 図 第4号住居跡 | 第29図 第17~20号土坑 |
| 第 9 図 第5・6号住居跡1 | 第30図 第1~3号溝状遺構 |
| 第10図 第5・6号住居跡2 | 第31図 第4~6号溝状遺構 |
| 第11図 第7号住居跡 | 第32図 第7・8号溝状遺構 |
| 第12図 第8号住居跡 | 第33図 埋納遺構 |
| 第13図 第8号住居跡微細図 | 第34図 出土遺物実測図1 |
| 第14図 第9号住居跡 | 第35図 出土遺物実測図2 |
| 第15図 第9号住居跡微細図 | 第36図 出土遺物実測図3 |
| 第16図 第10号住居跡 | 第37図 出土遺物実測図4 |
| 第17図 第11号住居跡 | 第38図 出土遺物実測図5 |
| 第18図 第11号住居跡微細図 | 第39図 出土遺物実測図6 |
| 第19図 第12号住居跡 | 第40図 遺構外出土遺物実測図 |
| 第20図 第13号住居跡 | 第41図 住居跡主軸方位 |
| 第21図 第14・15号住居跡 | |

表目次

出土遺物計測表.....	43
出土遺物注記番号表.....	47
遺構別計測表.....	50

第1章 調査の経緯と組織

第1節 調査にいたる経緯

国道411号は塩山市の市街地を抜け柳沢峠を経由して東京都青梅市に至る道路である。以前から観光で当地域を訪れる車や通過する大型自動車などが大変多いことで知られていた。特に塩山市内は道幅に余裕が少なく車両の対面通行や歩行者の安全確保などのため、早急に市街地を迂回して走るバイパス建設が必要とされてきた。このため、昭和63年に県土木部から県教育委員会に塩山東バイパス建設事業計画が提出された。

発掘調査は平成元年の獅子之前遺跡を皮切りに用地買収の実施された地点からバイパス路線を南下して行った。こうした中、五反田遺跡は平成10年度の試掘調査でその存在が明らかとなり、平成12・13年度に調査が行われた。

第2節 調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

調査担当者（山梨県埋蔵文化財センター 文化財主事）

平成12年度 平成13年度

古屋勝之 ○

齊藤 伸 ○

吉岡弘樹 ○ ○

作業員および整理員

天野亜一 天野きみ子 天野駿一 雨宮久美子 雨宮節子 加賀美昌友 栗原礼子

黒瀬信子 久保田裕美 佐藤裕美 田辺秋太郎 田辺幸大 田辺君代 土屋雄一

寺内みち子 戸田ひろ 林 周子 深沢茂子 望月哲夫

第2章 遺跡の概観

第1節 地理的環境

五反田遺跡は、山梨県塩山市熊野地内に所在する。塩山市は甲府盆地の北東部に位置し、北は秩父山地を挟んで埼玉県秩父郡大滝村と、西を東山梨郡三富村・牧丘町、山梨市に、南は東山梨郡勝沼町・大和村と接している。東もやはり秩父山地を挟んで、郡内地域の北都留郡小菅村・丹波山村、大月市と境界している。北東から南西方面に細長い市域を持ち、総面積は184.74 km²と広域で山梨県の総面積の4.1%を占めている。人口は2000年1月1日現在で、26,908人を数える。

市域の約80%は標高600m以上の山林や原野で占められ、その北部から東部にかけては、大菩薩嶺(2,057m)、笠取山、唐松山などをはじめとする急峻な山岳地帯を形成し、柳沢峠以東は東京都の水源林ともなっている。これらの深い山岳地帯に源を発し、市域西方を笛吹川が流れ、ほぼ中央部を重川が南北に流下している。これらの河川によって河岸段丘の発達もみられる。市街地はこの両河川によって形成された扇状地上に位置し、標高350m~600mの平地に集積している。

五反田遺跡はこの重川右岸の扇状地上に位置し、標高は約335mを測る。遺跡から北方を望むと標高552.8mの塩ノ山が市街地を凝視している。この塩ノ山は

「しほの山差出の磯にすむ千鳥 君が御代をば八千代とぞなく」

という長寿を祝う歌として、古今和歌集に詠まれたことで有名である。武田信玄の八代前にあたる武田信成によって迎えられた名僧抜隊得勝禪師が、康暦2年(1380年)に向嶽寺をこの塩ノ山の南麓に開創し、その際に「しおのやま」を「塩山」とし寺の山号とした。それが塩山の地名の由来ともなっている。

遺跡の所在する熊野の地名の由来は、大同2年(807年)紀州から勧請したと伝える熊野社が鎮座することによるという(甲斐国志)。この熊野社は現在では、甲府市上小阿原・八代町・大月市岩殿にある三社とともに甲州の四大熊野とも呼ばれている。

遺跡の周辺は花崗岩地帯であり、古くから扇状地上を流れる重川の相次ぐ氾濫に定期的にみまわれ、花崗岩が風化した水はけのよい砂礫層が堆積している。特に基盤層となっている黄色砂質土中には、洪水のなかでも特に大規模なものによってもたらされたと考えられる岩が多数含まれている。このように水はけのよい土地柄から最近では、ブドウ・桃・スモモなどの果樹栽培が盛んであるが、江戸時代には稻作が中心であったというから花崗岩対策として、近世以降大規模な開墾や土の搬入が行われたものと考えられる。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

五反田遺跡(1)の所在する塩山市は、市内を流れる笛吹川と重川による複合扇状地に遺跡の分布が集中している。特に重川水系では縄文時代の遺跡の集中が顕著であり、なかでも縄文中期の遺跡数は他の縄文時代の遺跡数を圧倒している。代表的な遺跡としては、まず底部穿孔埋甕や底部欠損埋甕が出土した町田遺跡(2)が挙げられる。さらに重川上流域の左岸地帯には遺跡が集中し、藤内式期の土坑埋設土器を多量に出土した柳田遺跡(3)や藤内式期から井戸戸式期にかけての住居跡から、40個体を超える大量の土器を出土した重郎原遺跡(4)がある。さらに重川の支流である文殊川右岸の殿林遺跡(5)では、大型で技巧的にも優れた高さ70cmの深鉢形土器が出土し、国の重要文化財に指定されている。またイノシシ装飾付的土器が出土した北原遺跡(6)も名高い。重川中流域では、縄文中期前半の住居跡19軒から多量の土器や土偶が出土した安道寺遺跡(7)がある。中期後半の遺跡では、養柳川右岸の河岸段丘上に立地し、配石構造や曾利式期の土坑群が確認された牛奥遺跡(8)などが有名である。弥生時代の遺跡は市域では非常に少なく、重川流域の河岸段丘上または扇状地に点在するにとどまる。古墳時代の遺跡は笛吹川と重川に挟まれた冲積地に集中している。この時代の代表的な遺跡として、本遺跡から西へ800m離れた場所に古墳時代前期の住居跡が54軒も確認された、県内でも最大級の集落跡の遺跡として有名な西田遺跡=現在の塩山警察署庁舎(9)がある。奈良・平安時代の遺跡は市域全体におよび、市内の遺跡数の約半数を数えるが本遺跡の所在する重川右岸の熊野・西広門田などの地区では、平安時代以降の遺跡が年々増加する傾向にある。

このように塩山市は遺跡が濃密に分布する地域なので、ここでは本遺跡と同様に塩山東バイパス(国道411号)



第1図 遺跡位置図 S=1/25,000

- 1 五反田遺跡 2 町田遺跡 3 柳田遺跡 4 重郎原遺跡 5 殿林遺跡 6 北原遺跡 7 安道寺遺跡 8 牛奥遺跡
- 9 西田遺跡 10 獅子之前遺跡 11 保坂家屋敷墓遺跡 12 西畠遺跡 13 下西畠遺跡 14 影井遺跡 15 大木戸遺跡
- 16 西堀遺跡 17 東田遺跡 18 芦原田遺跡 19 中道遺跡 20 熊野神社遺跡 21 梓畠A遺跡 22 梓畠B遺跡
- 23 下に曾八反田遺跡 24 正泉A遺跡 25 正泉B遺跡 26 熊野八反田遺跡 27 下整田遺跡 28 熊野前田遺跡
- 29 石滑B遺跡 30 石滑A遺跡 31 池田遺跡 32 横堀遺跡 33 受地遺跡 34 田辺氏屋敷遺跡 35 林際遺跡
- 36 字賀屋敷遺跡

に関係した遺跡に限定して主要な遺跡を北からみていく。

まず1989～1990年に調査され、全国的に珍しい縄文時代の前期土偶や水晶の原石など貴重な遺物が出土し注目された獅子之前遺跡(10)がある。さらに黒川金山衆に関係する家柄の江戸時代の屋敷墓地で、骨壺や人骨が出土した保坂家屋敷墓遺跡(11)が1999年に調査された。さらにその南側に隣接して1998年に調査され、平安時代のムラの跡や近世から近代にかけて利用されていた道路跡が確認された西畠遺跡(12)が存在する。その西畠遺跡から200m南西には1997～1998年に調査された下西畠遺跡(13)が所在し、古墳時代前期の有力者の墓と考えられる方形周溝墓が検出された。その南の影井遺跡(14)では、平安時代のムラの跡や中世の建物跡が発見され、青磁片や灰釉陶器が出土した。この影井遺跡から約200m南には1998～1999年の2ヶ年に渡って調査され、縄文時代の前期から中期の住居跡や平安時代の住居跡などが検出され、ほぼ完全な形の綠釉陶器も出土した大木戸遺跡(15)がある。この大木戸遺跡の約300m南に本遺跡は存在する。

他にも塩山市には中世の遺跡がわざわざ多く、特に武田氏に関連する遺跡が市域に分布している。恵林寺・向嶽寺・菅田天神社などに代表される武田氏と結びつきをもつ寺社も数多く存在する。また上萩原の黒川金山遺跡は、戦国期の甲州金山を語るうえでは欠かすことのできない資料であり、1986年に開始された黒川金山遺跡研究会の学術調査などにより次第にその全容が明らかになりつつある。

参考文献

『塩山市史』 塩山市教育委員会 1996

『角川日本地名大辞典』 19 山梨県

角川日本地名大辞典編纂委員会 1984

『西田遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第138集

山梨県教育委員会 1997

『一ノ坪遺跡』 山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第141集

山梨県教育委員会 1997

第3章 調査方法と基本層序

第1節 調査方法

発掘調査前に実施された試掘調査結果から熊野地区内のバイパス建設予定地内に長さ約300mに渡る古墳時代から平安時代にかけての集落が展開されることが予測された。この結果から約3,600m²を調査対象地と定め用地買収等の関係から2箇年の計画で発掘調査が予定された。

平成12年度調査区 2,800 m²

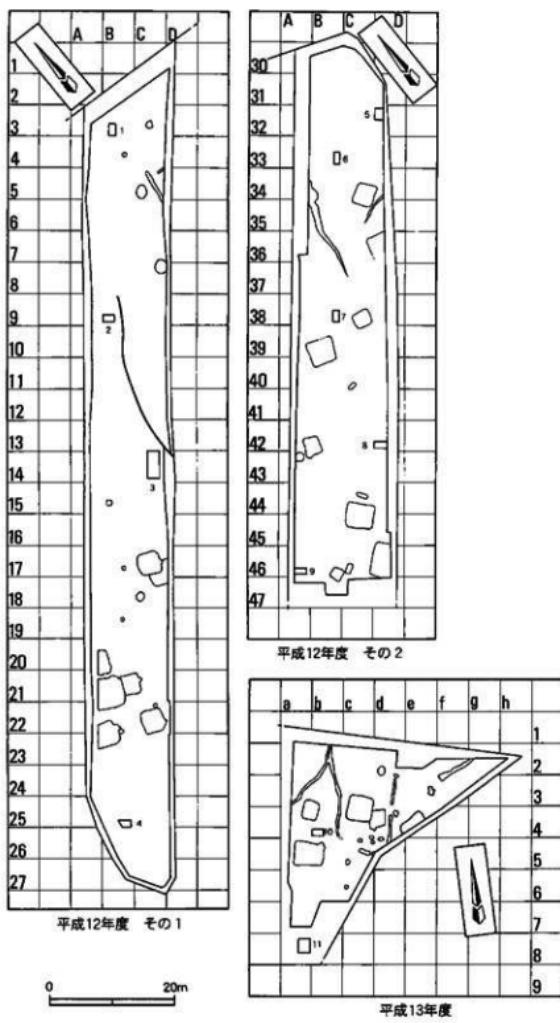
平成13年度調査区 800 m²

本調査は、遺構検出面まで油圧シャベルによって土砂を除去し、その後は人力による掘り下げ・精査を行い遺構検出作業を実施した。グリッドは5mの設定とし西から東にA B C D..... 北から南へ1 2 3 4..... と番号を調査区の形状に合わせ振り分けた。

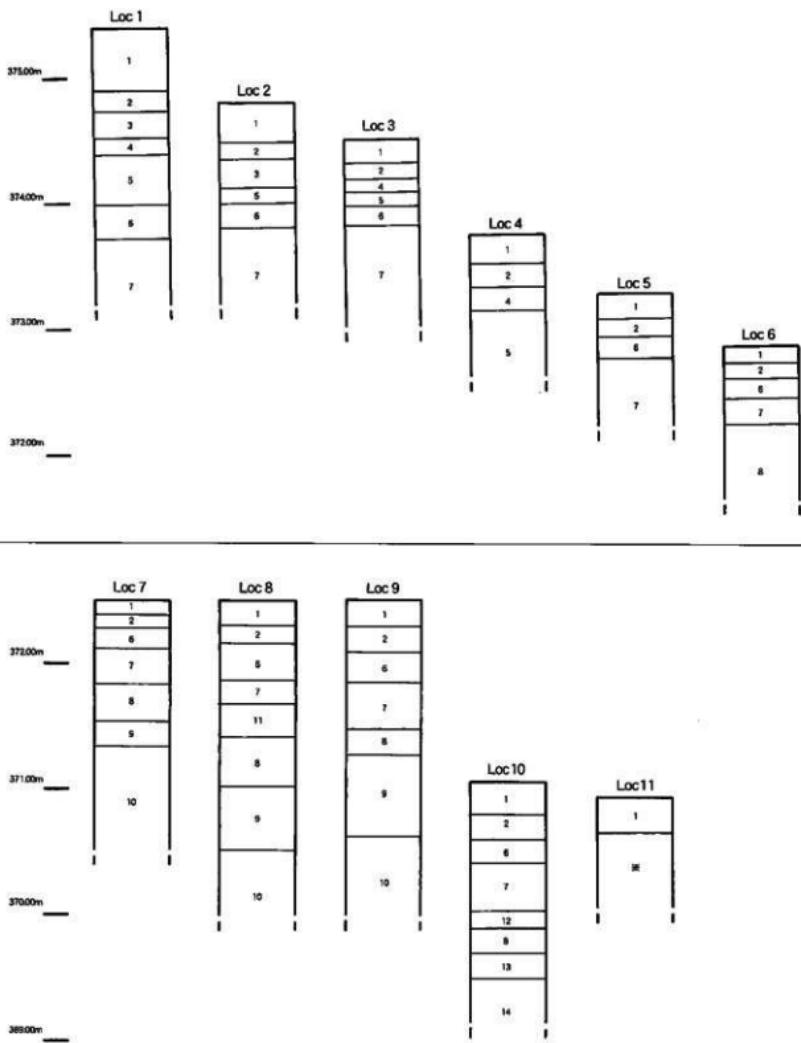
なお、調査中は当埋蔵文化財センター安全衛生基準を遵守し危険防止に努めたことを付け加えておく。



第2図 調査範囲図



第3図 基本層序観察位置図



第4図 基本層序柱状図

第2節 基本層序

本遺跡の基本層序は以下のとおり観察された。

※	埋め立て瓦礫層
1層	表土・耕作土
2層	黄褐色砂質土 【大木戸遺跡遺構最終確認面か?】
3層	明茶褐色砂質土
4層	茶褐色土
5層	暗茶褐色土
6層	暗茶褐色土
7層	黒灰色砂質土 【古墳時代前期・平安時代住居跡検出面】
8層	黒灰色砂質土 【古墳時代前期住居跡検出面】
9層	白灰色砂質土
10層	白灰色砂質土
11層	茶褐色砂質土+暗黃褐色砂質土の互層
12層	薄黒褐色砂質土
13層	暗茶灰色砂質土
14層	暗灰色砂礫

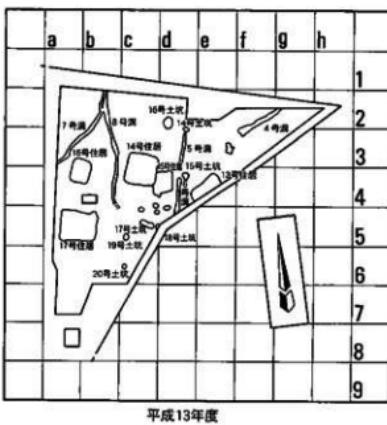
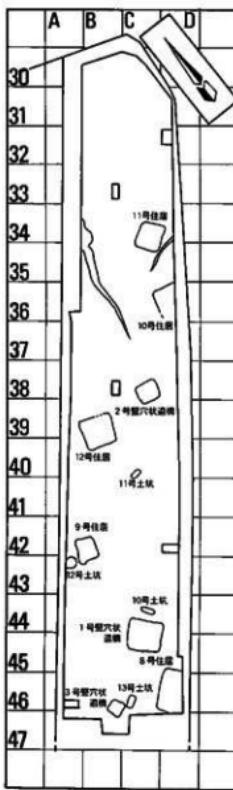
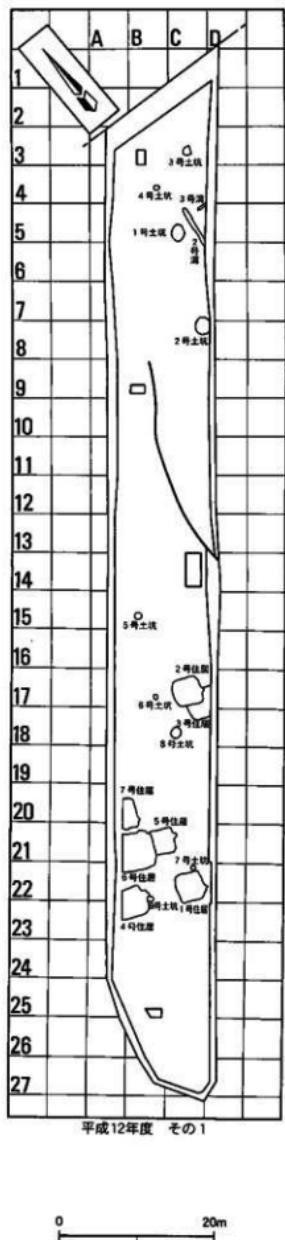
調査区北端部の大木戸遺跡にもっとも接近した箇所から遺構配置など考慮しながら大まかに20~25mおきに12箇所観察した。対象地は緩やかな傾斜を持ち北端部の標高約375.5mから南側約372.0mまで3.5mの標高差を示している(第4図基本層序柱状図参照)。

土層は重川に注ぐ支流に近接しているがそれほど氾濫の影響は感じられず当初の予想に反して比較的安定した堆積状態が観察できた。しかし、各所に農業資材の廃棄物を投棄したゴミ穴が用地内に点在していたため、発掘調査時の大きな障害となってしまった。

20~40cmの薄い表土あるいは耕作土下に約20cm厚で調査地全体を覆う2層である黄褐色砂質土層が認められる。これは平成11年度調査の大木戸遺跡遺構最終確認面である。これについては当時の担当者から確認が取れているものである。主要な遺構である住居跡はD-17区より南方の7層よりで検出されている。北側からこの地点に近接するLOC5ではLOC1から見られてきた2層下の3・4・5層などは消滅し6層が浅い位置に現れてくる。さらにこの両辺の7層からは遺物の集中とともに古墳時代前期住居跡が確認される。また、LOC6からはそれまで1m以上の厚い堆積をみせていた7層が約20cmの厚さにまで薄くなり、変わって黒灰色砂質土である8層が姿を現す。LOC7からは30cm前後の堆積となるが南方に行くに従って安定する傾向を示す。また、この地点からは、8層下に2層にまたがる白灰色砂質土層が観察される。

平成13年度調査区はLOC9から1m以上の高度差がある。LOC10では、20cm程度の非常に薄い表土層の直下に約15~25cmで大木戸遺跡遺構最終確認面の黄褐色砂質土層が確認できる。さらにその下7層と8層の間に12層が現れてくる。基本的には7・8層と同意層であろうが暗黃褐色の3cm程度のブロックがわずかに確認できるものである。13層は、砂質土の要素が非常に強くその下層に砂礫層が存在することを暗示させることができる。

なお、調査区最南端部のLOC11ではかなりの深度まで瓦礫等によって埋め立てられており、当初、段丘の縁部分と推測していた位置より5~7m北側が重川などによって形成された本来の段丘縁辺部と言ふことが判明した。



第5図 遺構配置図

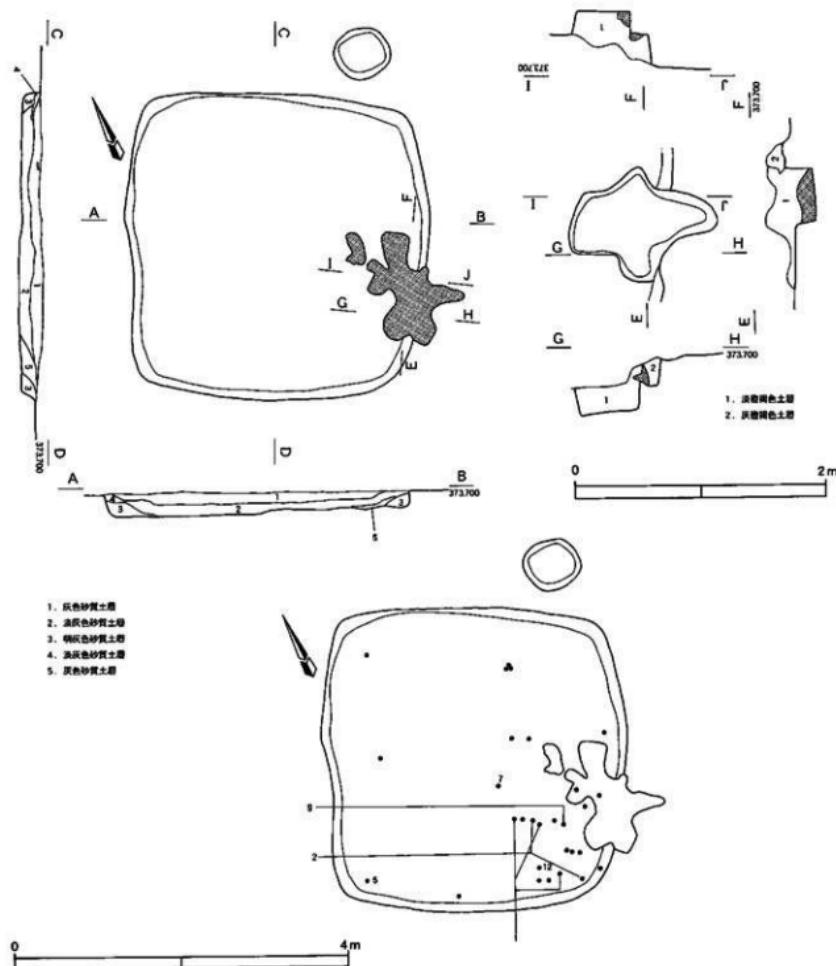
第4章 発見された遺構と遺物

第1節 住居跡

本遺跡では17軒の住居跡が検出され、北側より適宜住居をNo.1, 2, 3...と設定した。

第1号住居跡

調査区北側のC-22, D-22区に位置して検出された。



第6図 第1号住居跡

長軸方位をE-26°-Sに取る。平面形は、ほぼ隅丸正方形を呈し、規模は3.68×3.65m、床面は全体に平坦で平均約373.40mの標高を測る。また、壁高は約18~30cmを測り、壁は急角度を持って立ち上がる様相を示す。覆土は自然堆積で5層に分層できる。床面は必ずしもしっかりと貼った様子は確認できない。これは周囲に粘質土がなく砂質土が全体のベースとなっているためと考えられる。竈は東壁中央やや南寄りに設けられている。0.91×1.18m、深さ0.48mの規模を呈している。内部からは石組み等の痕跡はみられなかった。また、焼土の検出も少量にとどまった。遺物の出土は住居南側コーナー付近に集中している。1~4は甕、5~9は壺、10は皿である。なお、柱穴・周溝などは検出されなかった。構築された年代は8世紀後半と推測される。

第2号住居跡

C-17区に位置して検出された。

長軸方位をE-22°-Sに取る。平面形は、隅丸正方形を呈し、第3号住居を切り込んで構築されている。規模は3.65×3.58m、床面は全体に平坦でしっかりと貼床は確認できなかった。これは周囲に粘質土がなく砂質土が全体のベースとなっているためと考えられる。床面平均高度は約373.30mの標高を測る。壁高は約45~50cmを測り、当遺跡検出の住居跡の中でも深深度のものといえる。壁はやや緩やかに立ち上がる。覆土は自然堆積でおおよそ10層に分層できる。竈は東壁中央やや南寄りに設けられている。0.98×0.70m、深さ0.60mの規模を有し、両袖および袖石がきわめて良好な状態で検出された。また、焼土の検出は少量にとどまった。主要遺物の出土は竈周辺に集中している。1・2は小型甕、3は鉢、4~6および8・9は壺、7は坏蓋である。なお、柱穴・周溝などは検出されなかった。坏類などからみて構築された年代は9世紀第2四半世紀と考えられる。

第3号住居跡

C-17・18、D-17・18区にまたがった位置にある。

1/3程が調査区外にあることと、残り面積の1/3が第2号住居跡に切られていることなどから主軸方位等の判断に苦しむ。平面形は、隅丸正方形を呈するものと思われる。床面は全体に平坦でしっかりと貼床は確認できなかった。これは他の住居跡と同様に周囲に粘質土がなく砂質土が全体のベースとなっているためと考えられよう。床面平均高度は約373.60mの標高を測る。壁は緩やかに立ち上がる形状を取り、壁高は約15cmを測る。竈・柱穴・周溝などは検出されなかった。なお、図示し得る遺物の出土は2点しかなくとも坏である。また、そのうちの1点は墨書きである。遺物2点は小破片であるため時期の決定は難しいが、おおよそ8世紀第3~4四半世紀と考えられよう。

第4号住居跡

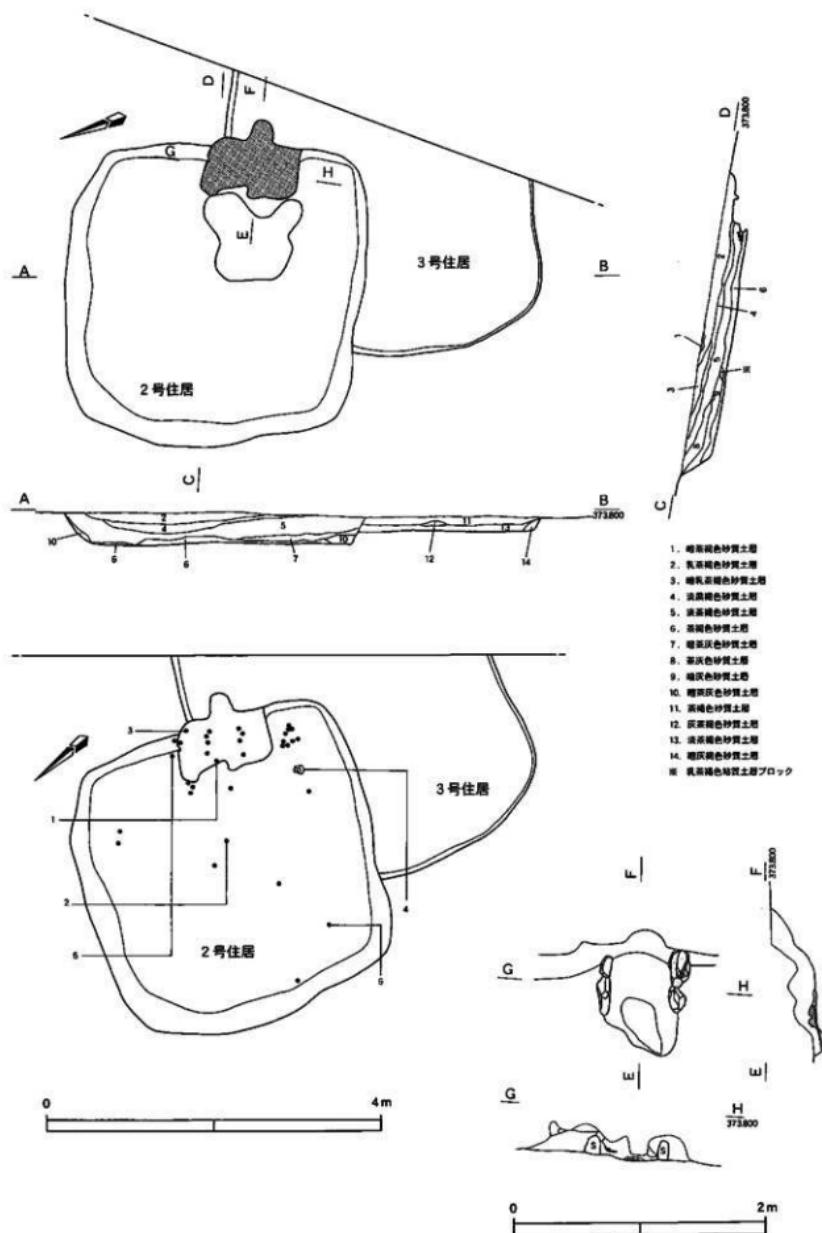
A-22・23、B-22・23区に位置して検出された。

北西部が調査区外にあるためその全容は明らかではないが、平面形は隅丸正方形を呈するものと理解できる。東壁の状況から規模は一辺が約3.80mであったことが推される。主軸方位はE-12°-Sを取る。床面は全体に平坦でしっかりと貼りしており、竈付近に3箇所のピットが確認できた。床面平均高度は373.45mを測る。壁高は約20cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は自然堆積で2層に分層できる。竈は東壁中央に設けられており、第9号土坑により切られている。その規模は1.20×0.76m、深さ0.42mを測る。焼土は底面部に厚く検出された。図示し得る遺物の出土および周溝などは検出されなかった。このため構築時期の特定は難しい。

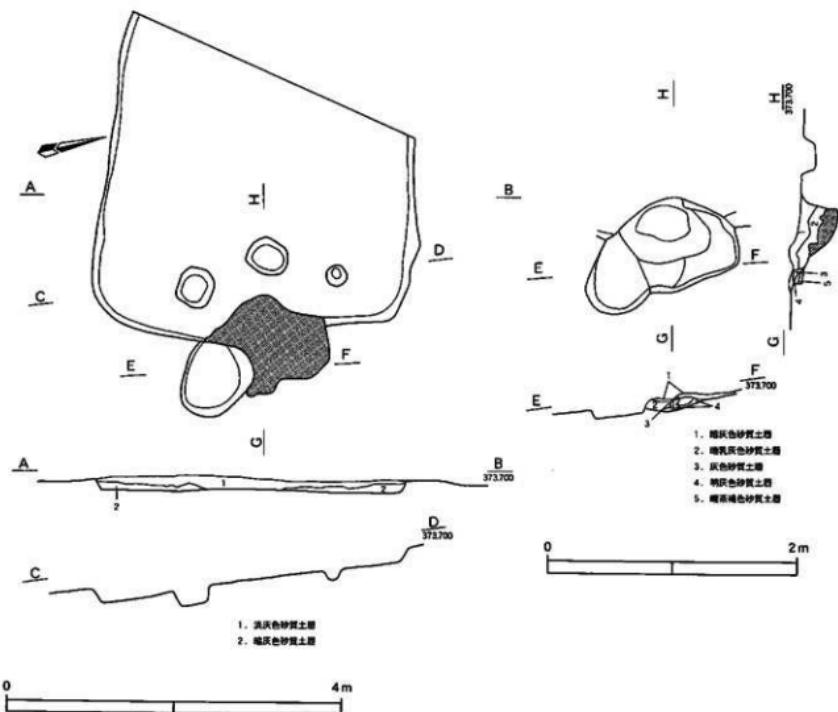
第5号住居跡

C-21、D-21区に位置して発見された。

西側壁付近の大部分を第6号住居跡により削平されている。また、北・南側壁の一部分において試掘トレーン開口時の影響がみられた。平面形は3.20×3.10mの隅丸正方形を呈し、E-31°-Sに主軸方位を取る。ほぼ平坦な床面（床面平均高度一標高約373.50m）を持ち、壁は約40cmの高さで緩やかに立ち上がっている。竈は東壁中央わずか北寄りに設置されている。規模は1.58×0.60m、深さ0.60mを測る。袖石は4石検出され、内1石は元位置を止めていた。また、焼土は住居の中心部にかけて2箇所に飛散していた。遺物は甕が1点出土したのみである。9世紀第3四半世紀頃の構築であろうと推される。



第7図 第2・3号住居跡



第8図 第4号住居跡

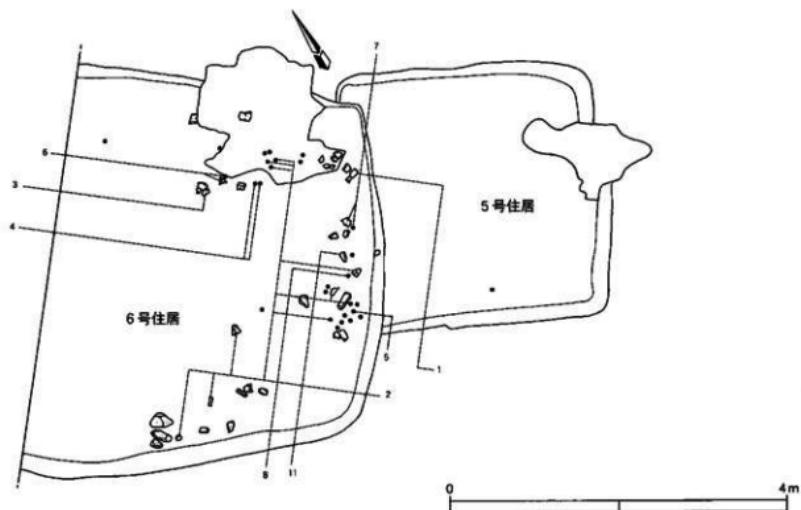
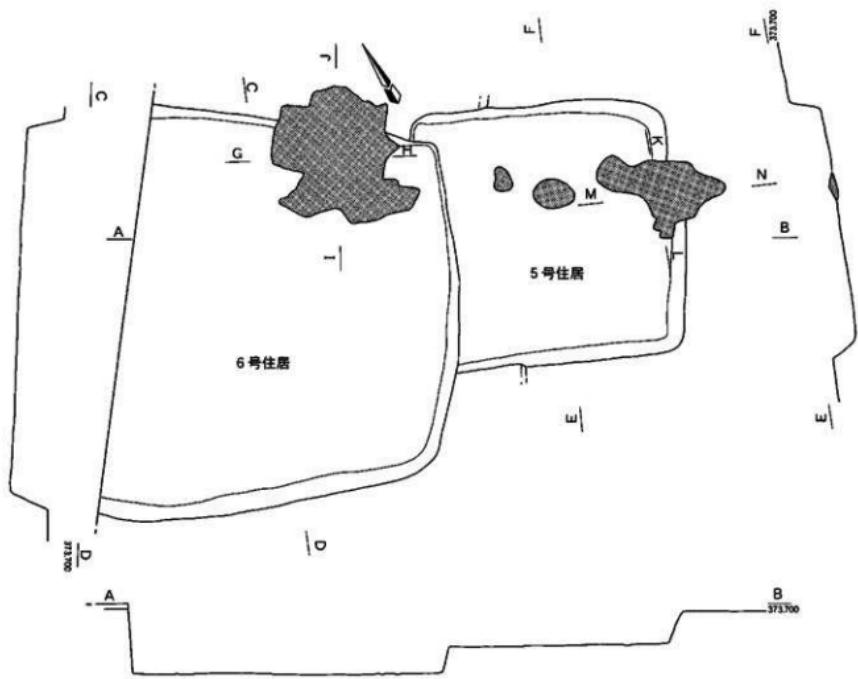
第6号住居跡

A-21・22、B-21・22区に位置し、第5号住居跡を切り込んで構築されている。北西部は調査区外のため未掘となっている。平面形は疊んだ隅丸方形形状を呈しており、その規模は1辺が約5m前後となることが予測される。主軸方位はN-24°-Eを示す。床面（床面平均高度-標高約372.50m）は平坦であり、壁は約57cmの深度を有し、ほぼ垂直に立ち上がる。竈は北壁の東寄りに設置されており、1.68×1.11m、深度0.58mの規模を持つ。全体に崩落が激しく認められ依存状態も決して良いものとはいえない。焼土は底面付近全体に堆積をみせていた。遺物の出土は竈周辺や東側壁寄りに多く集中している。1はG類に属する須恵器壺、2は甕、3～16は壺であり14～16には墨書きが施されている。遺物に若干の時期差がみられるため構築時期は9世紀前半から第3四半世紀と幅を持たせておきたい。

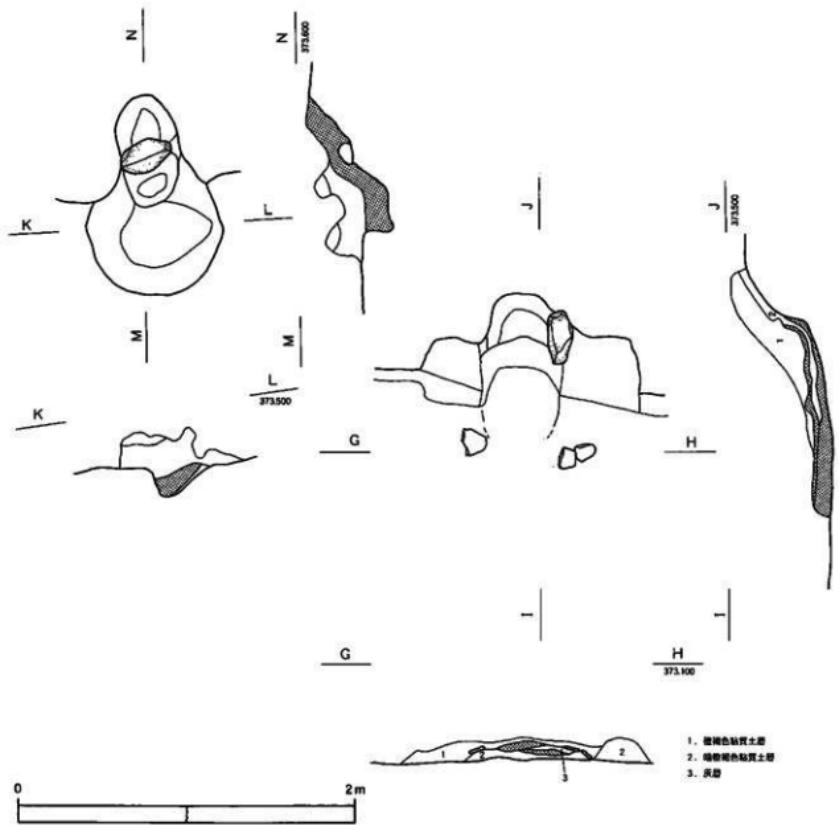
第7号住居跡

A-20・21、B-20・21区に位置し、全体の3/5程は調査区外にある。

平面形状は隅丸方形形状を呈し、主軸方位はE-11°-Sを示す。床面は平坦で平均床面高度373.15mを測る。壁の状況は北側では垂直に近い立ち上がりをみせるが南側では緩やかな状態が観察できる。壁高はおおよそ30cmである。竈は検出時において粘質土の分布が広くみられた。これは住居廃絶時の竈上部の破壊が大きく行われたことを物語っている。しかしながら、底部部分の残存状態は良好で両袖石が元位置にて検出されている。



第9図 第5・6号住居跡 1



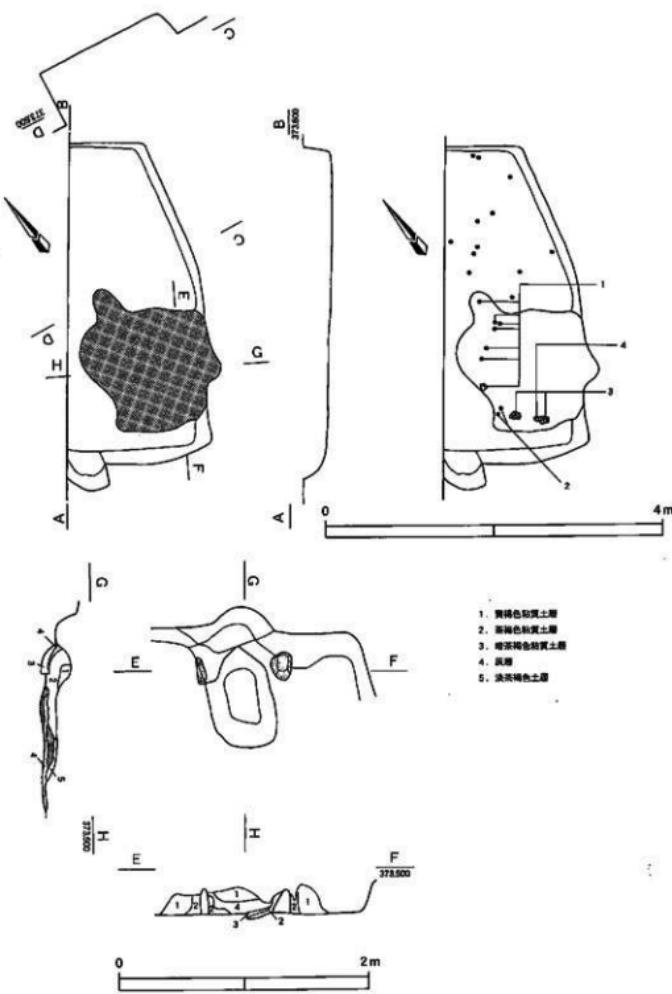
第10図 第5・6号住居跡2

焼土の分布は2箇所に薄く確認されたに過ぎない。規模は $1.14 \times 0.80m$ 、深度 $0.23m$ を測る。遺物の出土は全体にみられるが図示できるものは爐からのものしかない。1・2は甕、3~5は壺である。当住居跡の構築時期は9世紀後半であろう。

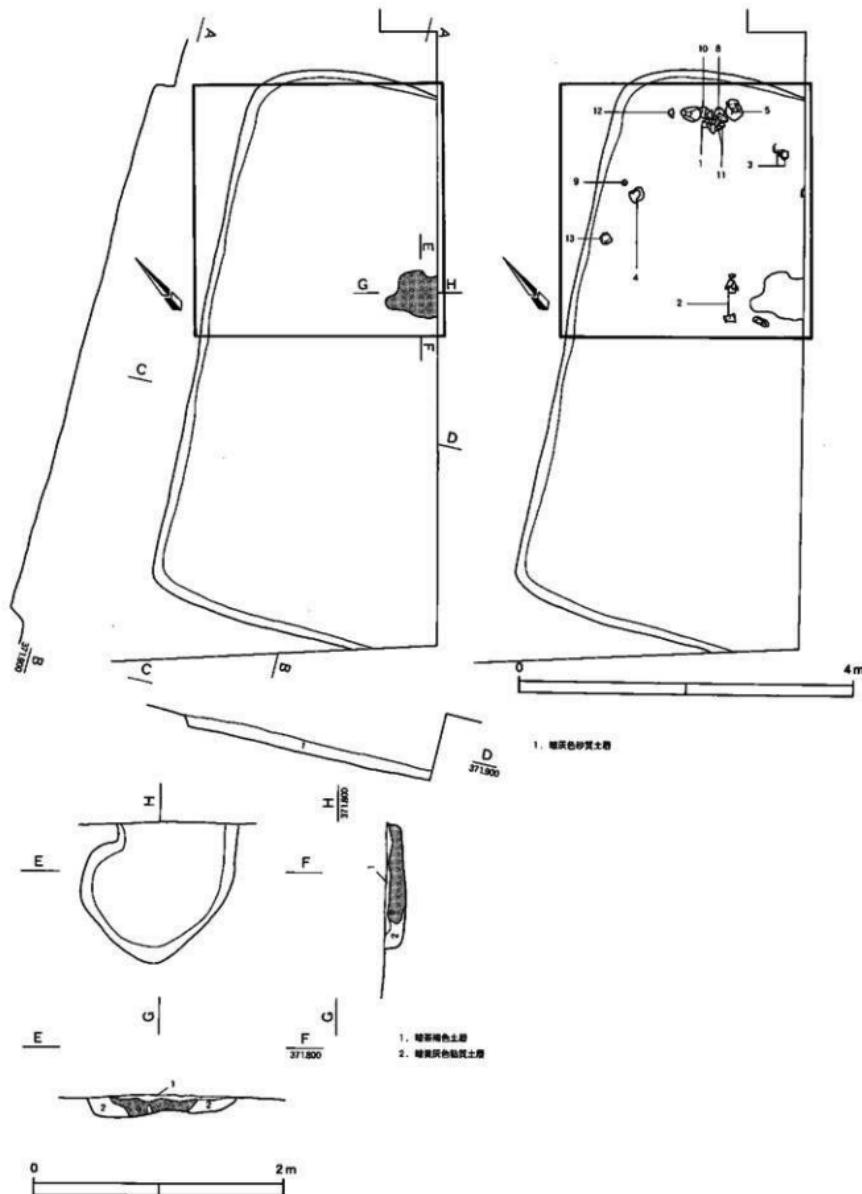
第8号住居跡

C-46、D-45・46区にあり、ほぼ1/2が調査区外にある。

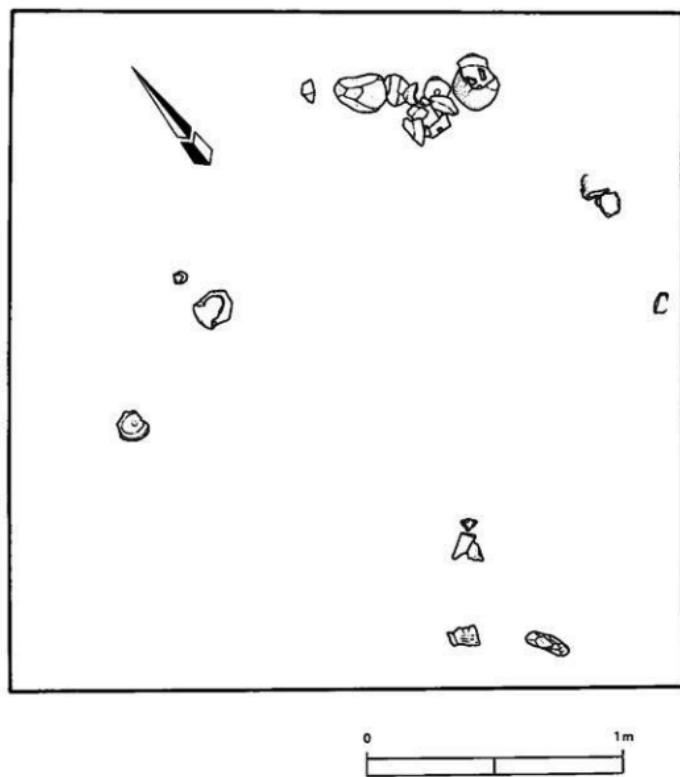
平面形状は1辺約 $6.4m$ の隅丸方形を呈するものと推測できる。床面の状態は中央部に炉が存在する以外はほぼ平坦であり、 $370.70m$ の床面平均高度を測る。主軸方位は、E- 53° -Sを示す。壁は全体にほぼ垂直に立ち上がり約 $25cm$ の浅い壁高を有する。住居中央より検出された炉は短軸 $0.95m$ 、深さ $0.16m$ の規模を持つ。また、北東壁寄りから出土した土器類はセット関係を示す良好な資料と言える。1-高壺、2-10-壺、3-甕、6-7-S字状口縁付甕、8-甕、9-小型甕、11-器台、12-鉢、13-壺である。構築された時代は遺物に多少の時期差が感じられるものの古墳時代前期（五領期）に位置付けられよう。



第11図 第7号住居跡



第12図 第8号住居跡



第13図 第8号住居跡微細図

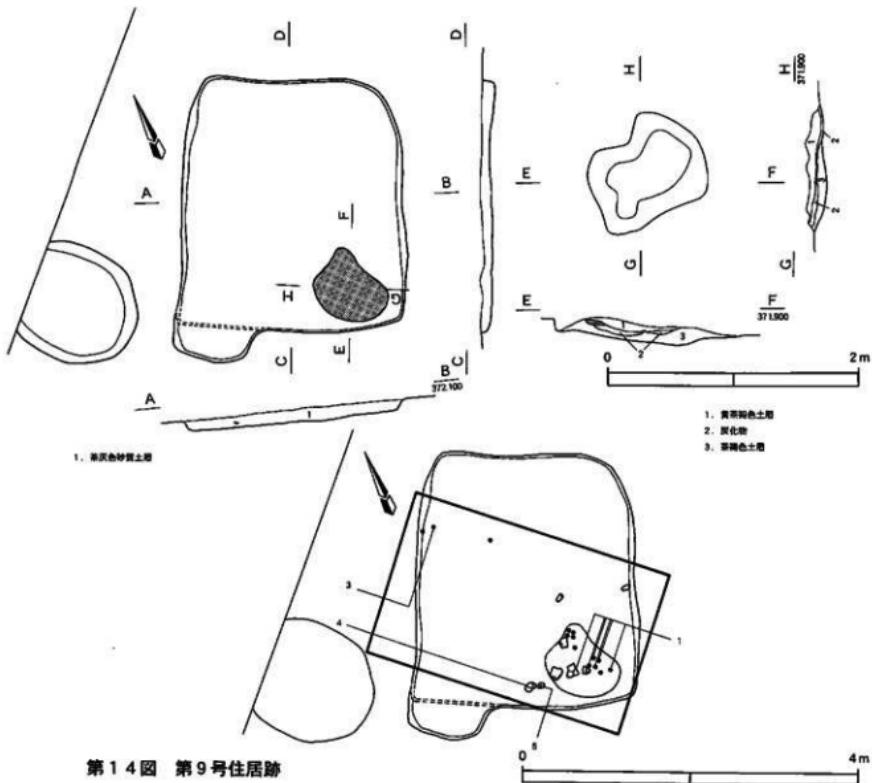
第9号住居跡

A-42・43、B-42・43区に位置している。

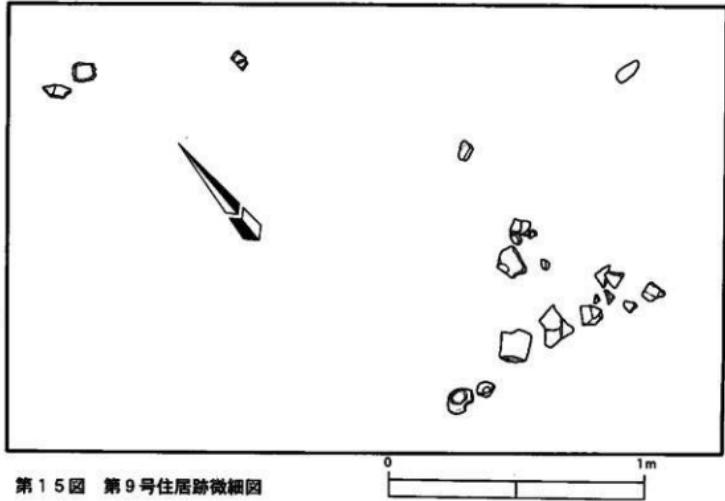
平面形状の基本形は隅丸方形である。しかし、南西コーナーにおいて外側に方形の張り出しが付帯している。規模は $3.00 \times 2.65\text{m}$ でN-22°-Eに主軸をとる。床面の状況は若干の起伏がみられるものの概ね水平である。壁の状況は北側ではほぼ垂直に近く、他所では緩傾斜を持って立ち上がっている。壁高は平均約15cm、床面平均高度は標高371.90mを測る。竈は南東コーナーに設置されており $0.94 \times 0.62\text{m}$ 、深さ0.20mの法量を有する。遺物は土器類が竈とその周辺、北側壁近くより出土している。1-鉢、2-甕、3・4-灰釉碗、5-脚高高台皿である。当住居の構築時期は脚高高台皿などの検討により11世紀前半代が妥当といえる。

第10号住居跡

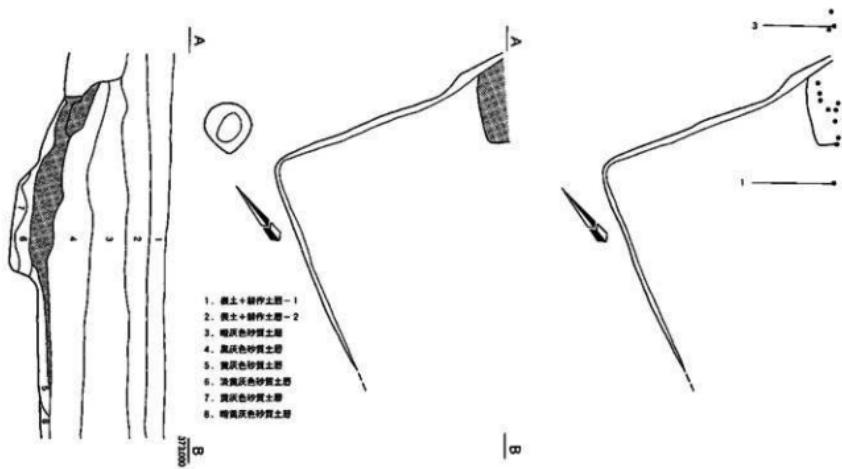
C-44・45、D-44・45区にあり、約1/2が調査区外にある。



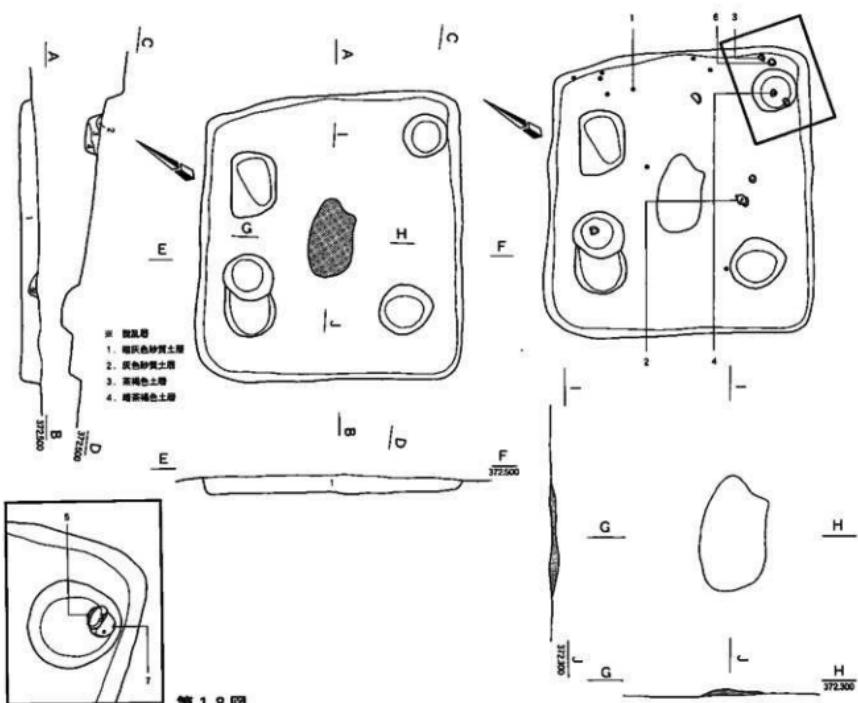
第14図 第9号住居跡



第15図 第9号住居跡微細図

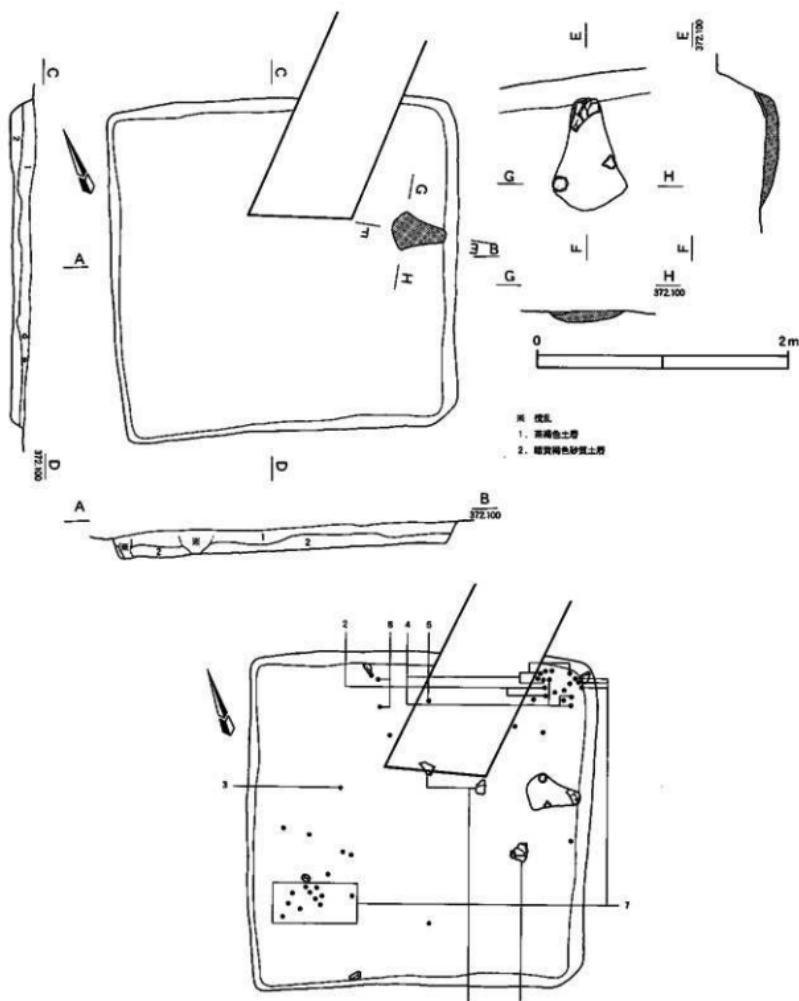


第16図 第10号住居跡



第18図
第11号住居跡微細図

第17図 第11号住居跡



第19図 第12号住居跡

確認状況は南側を中心に大きく削平されてしまっており、必ずしも良好な状態での検出とは言い難いものであった。このため正確な規格等については判断に苦しむ。主軸はN-38°-Eにとるものと推測される。竈は東側コーナーに設けられているが全容は明らかにし得なかった。遺物は土器類が竈とその付近から出土している。1-甕、2・3-S字状口縁台付甕である。構築時期は古墳時代前半である。

第11号住居跡

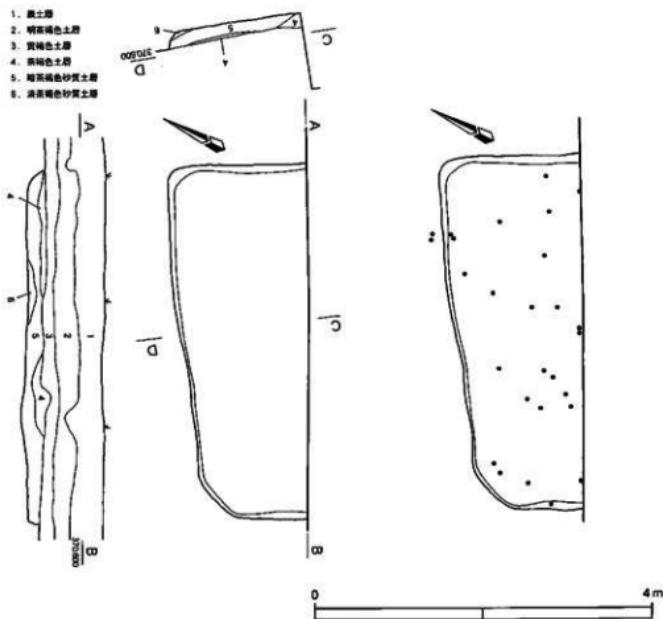
C-34・35区、D-34区に位置している。

平面形は、ほぼ隅丸方形を呈しており、3.38×3.12mの規模を有する。N-56°-Eに主軸を取る。床面は非常に安定した平坦面を形成しているが硬く貼られた床の印象はやや薄い。床面平均高度は372.20mを測る。ピットはそれぞれのコーナー付近より5穴が確認され東側コーナーのピットからは鉢と甕が1点づつ検出された。壁の状態は南西部がやや緩やかなほか他所ではほぼ垂直に立ち上がっている。壁高はおおよそ20cmである。炉は住居の中央から検出された。0.92×0.52m、深さ0.10mの法量を有する。遺物は土器類が住居東側から北側にかけて出土している。1-甕、2-S字状口縁台付甕、3・4-台付甕、5-鉢、6-堀、7-甕である。これらから当住居跡の構築年代は古墳時代前期（五領期）と推測される。

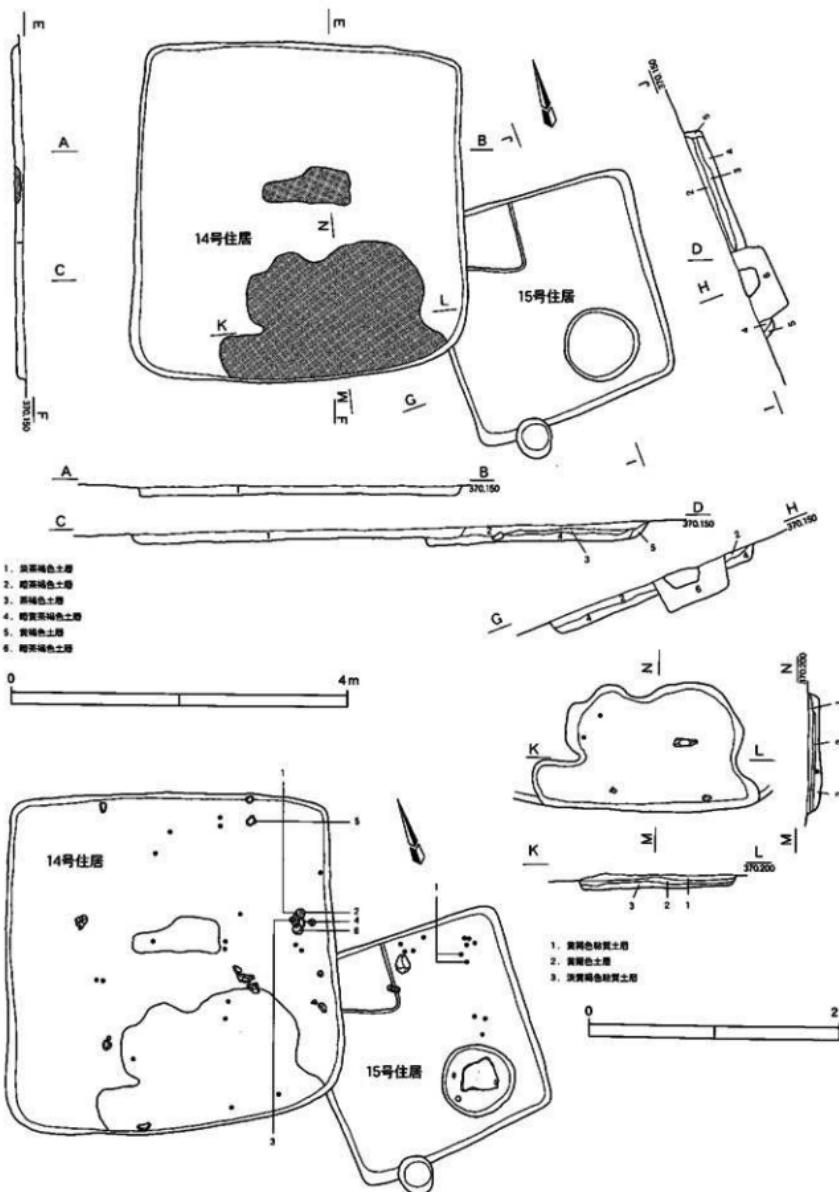
第12号住居跡

A-39区、B-39・40区に位置している。

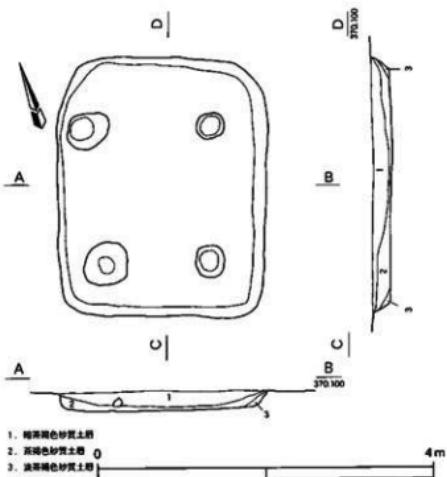
北壁の一部分を試掘調査トレンチによって欠損している。平面形は隅丸方形を呈しており、4.15×3.95mの



第20図 第13号住居跡



第21図 第14・15号住居跡



第22図 第16号住居跡

器類細片が住居全体より出土しているが、図示出来るものはない。しかし、住居の形態などから古墳時代の住居跡である可能性が強い。

第14号住居跡

c-3・4区に位置しており第15号住居跡を切って検出された。

平面形は隅丸方形を呈しているが南東部コーナーの形状は他の3つとは若干異なっている。規模は $4.00 \times 3.90m$ を測り、主軸方位はE-10°-Sを示す。床面はほぼ平坦で平均高度は標高370.00mを取る。壁は全体に垂直よりやや緩い立ち上がりをみせ、その高さは約10cmと浅い。竈は南壁に設けられ、住居廃絶時に大きく取り壊されていると考えられる。そのため竈構築粘質土の広がりは $2.70 \times 1.45m$ と広い。また、住居中央にも粘質土の集中が確認された。なお、深度は0.12mである。土器類は住居全体から出土しているが主として東壁付近に完形品が集中している。1~4-小皿、5-灰釉碗、6-脚高高台皿、7-綠釉碗である。構築された時期は当遺跡中でも新しく11世紀前葉から後葉と考えられる。

第15号住居跡

c-4区、d-4区に位置しており、第14号住居跡に切られる形で検出された。

平面形は隅丸方形を呈しており、 $2.65 \times 2.60m$ と小振りのタイプの住居跡である。主軸方位はN-84°-Eを示す。南壁にはピットが1穴検出されているが当住居跡との関係は判らない。床面はほぼ平坦であるが北西コーナー付近にベット状遺構が確認されている。床面平均高度は標高369.90mを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がりおりその高さは平均18cm程度である。竈は検出されていない。遺物は土器類が北側に集中して出土しているが図示できるものは器台が1点のみである。なお、住居内南東部に正円形の掘り込みが確認されているが、これは表土層からの非常に新しい時期に掘削されたものである。構築時期は出土した器台から古墳時代前期（五領期）と推測される。

第16号住居跡

a-3・4区、b-3・4区にまたがって検出された。

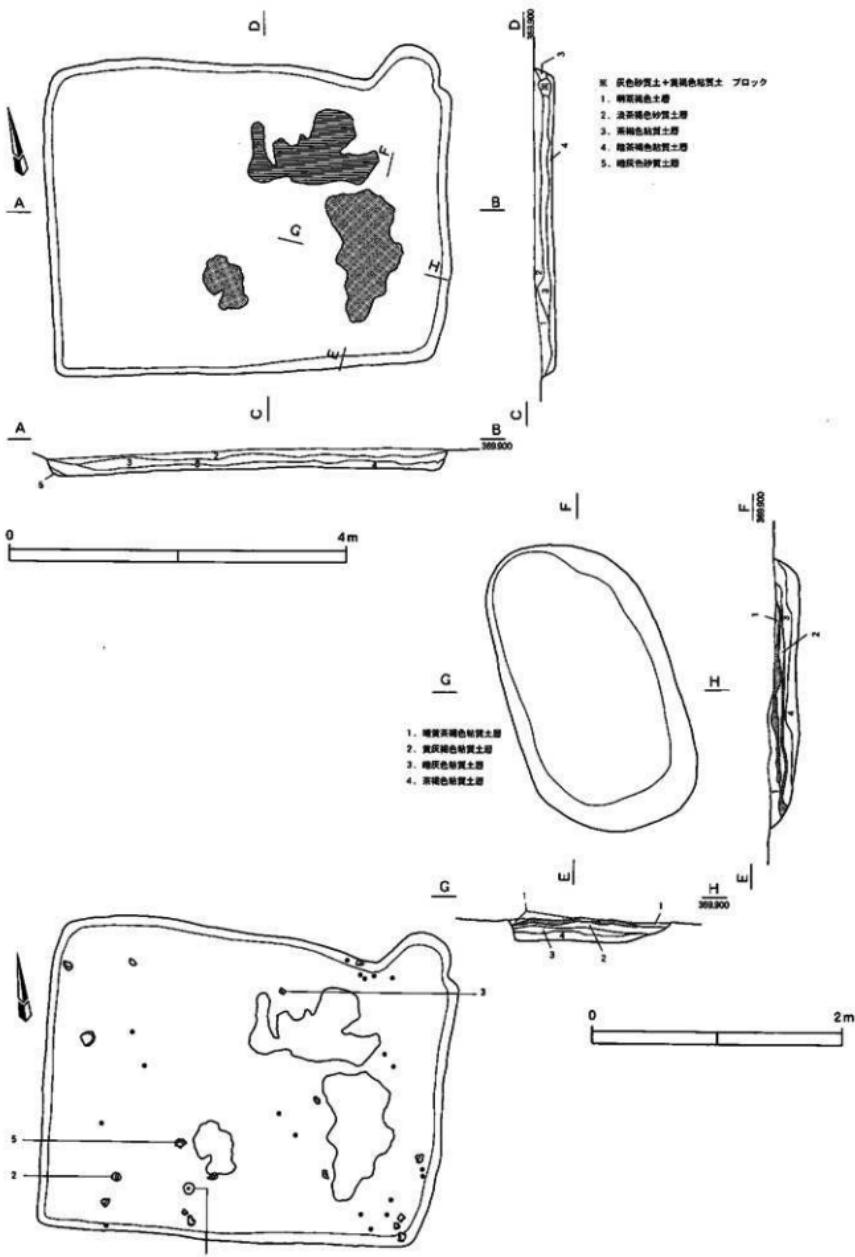
平面形は隅丸方形を呈している。 $3.05 \times 2.50m$ の法量を持つ。床面は平坦で四隅にピットが確認されている。

規模を有し、E-18°-Sに主軸を取る。床面は全体に水平で平坦である。床面平均高度は標高371.65mを測る。壁は18~28cmの高さを持ち緩やかに立ち上がる。竈は東壁の中央や北寄りに設置されている。規模は $0.90 \times 0.40m$ 、深度0.12mと小振りな印象を持つものである。遺物は住居の全体から出土しているが北東コーナーおよび北西コーナーに集中をみせる。1~6は甕、7~9は壺である。これらから当住居跡の構築時期はいわゆる甲斐型土器出現前の8世紀前半と考えられる。

第13号住居跡

d-4区、e-4区において検出された。

住居の1/2以上が調査区外にあるため全容は明らかにし得なかった。平面形は隅丸方形を呈しており、E-56°-Sに主軸が求められる。その規模は一辺がおよそ4.20mであることが推測できる。床面はほぼ平坦で平均高度は標高約369.15mを示す。壁は全体に緩やかに立ち上がっており、おおよそ20cmの高さを有する。炉は検出されなかった。遺物は土



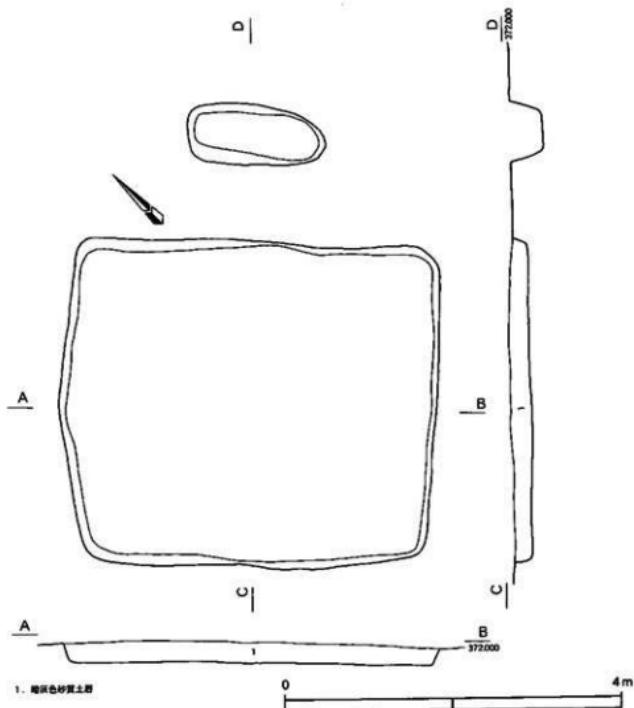
第23図 第17号住居跡

壁はほぼ垂直に立ち上がり、その高さはおよそ20cmである。床面平均高度は標高369.80mを測り、E-18°-Sに主軸を取っている。炉などの施設は検出されなかった。構築時期は遺物の出土がなかったため判断しにくいがその形状などから古墳時代のものとして差し支えない感する。

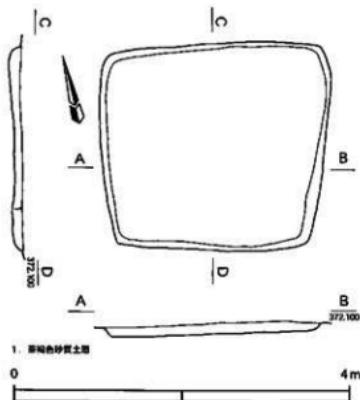
第17号住居跡

a-5、b-5区に位置して検出された。

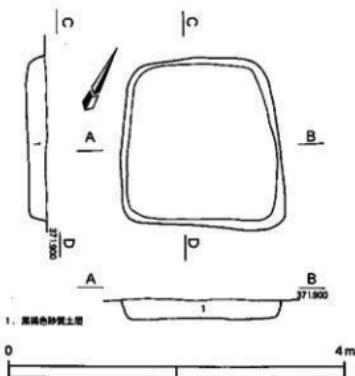
隅丸方形を基本形としているが北東コーナー部分に凹凸が生じている。この原因については後世の浅いビットに削平されたものと理解しておきたい。その規模は4.75×3.65mを測り、主軸はE-10°-Sに求められる。床面は水平で平坦に作られており、平均高度は369.60mの標高を持つ。壁はほぼ垂直に立ち上がりその高さはおよそ25cmを測る。竈は住居東側に設置されていたが廃絶時に大きく破壊されたことがうかがえる。竈北側の床面には1.60×0.90mに渡って薄く灰が分布している。また、西側には竈構築に使用したとみられる焼土混じりの粘質土も確認された。遺物は住居北西部を除く位置全体から出土しているが、図示できるものは南西部分に集中をみせる。1~3は壺、4~小型甕、5~灰釉碗である。これらの資料から9世紀第2四半世紀の構築と考えられる。



第24図 第1号竪穴状遺構



第25図 第2号竪穴状遺構



第26図 第3号竪穴状遺構

第2節 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構

調査区C-44・45区に位置する。

主軸方位をN-43°-Eに取る。平面形は、長方形を呈し規模は4.50×3.85mを測る。壁高は25cmを測る。壁は、やや緩やかな角度を持って立ち上がる様相を示す。覆土は自然堆積で1層である。床面は必ずしもしっかりと貼った様子は確認できない。これは周囲に粘質土がなく砂質土が全体のベースとなっているためと考えられる。床面平均高度は標高371.65mを示す。なお、柱穴・周溝などは検出されなかった。層位や形状などから古墳時代の構築と考えている。

第2号竪穴状遺構

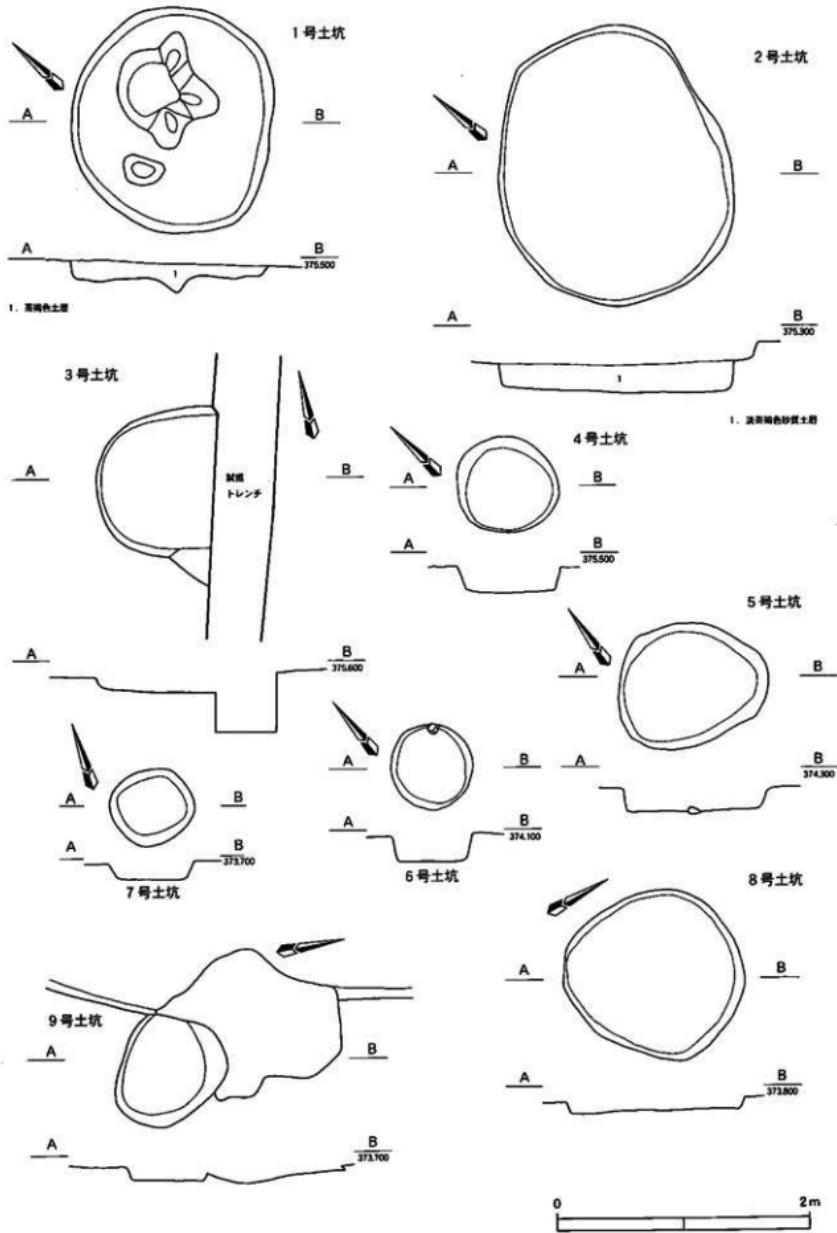
調査区C-38・39区において確認された。

平面形は隅丸方形状を呈し、2.60×2.45mの規模を持つ。主軸方位はE-13°-Sを取る。床面の状態は平坦である。壁はやなだらかに立ち上がり、その高さは約10cmを測る。床面の平均高度は標高約371.90mである。構築時期は形状などから古墳時代の可能性が強い。

第3号竪穴状遺構

調査区B-46・47区、C-46区において検出された。

平面形は隅丸方形状を呈している。規模は2.00×1.85mを測る。N-60°-Eに主軸方位をとる。床面は平坦であり、壁は南側は垂直に他所はやや緩やかな立ち上がりをみせる。壁高は約25cmを測る。床面平均高度は標高371.60mである。遺物はS字状口縁台付の小破片が1点出土したのみである。構築時期は古墳時代前期と考えられよう。



第27図 第1～9号土坑

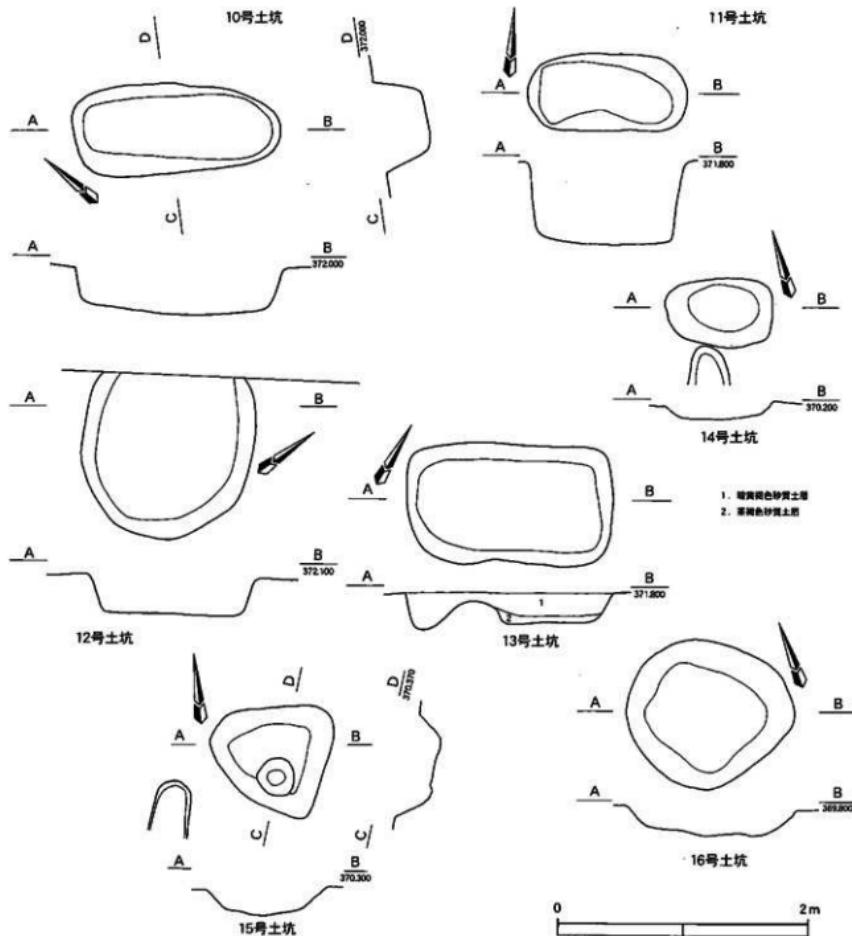
第3節 土坑

住居跡などと同様におおよそ北側から通し番号を付けることとした。

第1号土坑

C-5区において検出された。

平面形は上縁、坑底ともに正円形に近く壁はほぼ垂直に等しい急峻な傾斜を持って立ち上がる。規模は長径1.78m、短径1.58m、深度0.23mを測る。当土坑の特徴として坑底にいくつかの起伏がみられるが、これについ



第28図 第10～16号土坑

ては擾乱の可能性が強く構築時の坑底はフラットであったと考えて良いものと思われる。出土遺物はない。

第2号土坑

C-7・8区に位置している。

平面形は上縁・坑底ともに不整橿円形を呈し、壁は垂直に近い傾斜を持って立ち上がる形状を取る。その規模は長径2.23m、短径1.82m、深度0.24mを測る。また、坑底の状況はほぼ平坦である。土器などの遺物は出土していない。

第3号土坑

C-3区に位置して検出された。

約1/2が試掘調査トレーナによって削平されている状況で確認された。このため正確な平面形の断定は難しいが残存している部分の状況から橿円形状と想定されよう。規模は短径約1.20m、深度0.14mである。坑底の状況は鍋底状を呈している。土器などの遺物の出土はない。

第4号土坑

B-4区に位置している。

平面形は上縁・坑底部ともに円形で、坑底は鍋底状を呈している。壁は急峻な角度を持って立ち上がっている。規模は長径0.80m、短径0.78m、深度0.20mを測り、当遺跡検出の土坑の中では第5・6・7・14・19・20号土坑などとともに小型のタイプに属している。遺物の出土はない。

第5号土坑

B-15区に位置している。

第4・6号土坑などと同じ小型の土坑である。平面形は上縁・坑底ともに不整橿円形を呈する。坑底の状況は鍋底状である。規模は長径1.17m、短径0.80m、深度0.19mを測る。壁は急峻な角度で立ち上がっている。底面ほぼ中央に約10cmの自然石が検出されたほか遺物の出土はなかった。

第6号土坑

B-17区に位置する小型の土坑である。

平面形は上縁・坑底ともに正円形を呈する。壁は垂直に近く立ち上がる形状を示す。坑底の状況はフラットでいわゆる鍋底形状を持つ。規模は長径0.70m、短径0.62m、深度0.22mを測る。北東壁際から直径8cmほどの自然石が検出されたが、その他、土器などの遺物の出土はなかった。

第7号土坑

C-22区に位置している小型土坑である。

平面形は上縁・坑底ともに円形を呈している。坑底は平坦で壁は緩やかな傾斜を持って立ち上がっている。規模は長径0.65m、短径0.59m、深度0.14mを測る。遺物の出土はない。

第8号土坑

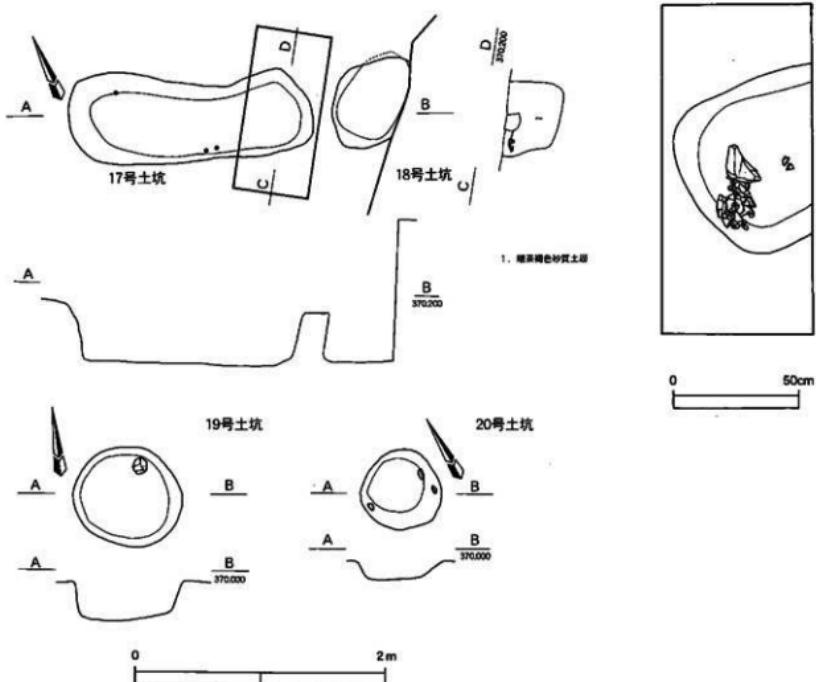
C-18区において検出された。

平面形は上縁・坑底ともに不整円形に近い形状を取る。坑底は、おおよそ平坦で壁は垂直に立ち上がる。その規模は長径1.43m、短径1.22m、深度0.10mを測る。なお、坑内からの遺物の出土はない。

第9号土坑

B-22区に位置しており第4号住居跡の龜を浅く切るように構築されている。

平面形は、上縁・坑底ともに不整円形状を呈している。坑底は平坦で壁は急角度で立ち上がっている。規模は長径0.89m、短径0.75mを測り深度は0.11mと浅い。土器などの遺物は全く出土していない。



第29図 第17~20号土坑

第10号土坑

C-44区にあり、第1号整穴状遺構のすぐ北側に位置している。

平面形は上縁・坑底ともに隅丸長方形を呈している。坑底にはわずかに傾斜を感じるがおおよそ平坦といつても差し支えない程度である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。規模は長径1.64m、短径0.69m、深度0.38mを測る。坑内からは土器片が1点出土しているが図示できるものではない。

第11号土坑

C-40・41区に位置して確認された。

平面形は、上縁では不整橢円形、坑底では不整円形を呈している。坑底は平坦で断面はタライ形状を取っている。規模は長径1.27m、短径0.61m、深度0.66mを測る。なお、坑内からの遺物の出土はなかった。

第12号土坑

A-43区にあり、第9号住居跡の西側に位置取っている。

調査区端部にて検出されたためその1/4程は調査区外にある。平面形状はほぼ正円形を呈しており、坑底は平坦である。壁は急傾斜を持って立ち上がっている。規模は、短径1.34m、深度0.31mを測る。なお、土器などの遺物の出土はなかった。

第13号土坑

C-4区にあり、第3号竪穴状遺構の東側に位置している。

平面形は上縁・坑底ともに隅丸長方形を呈している。壁は急傾斜を持って立ち上がっている。坑底部の形状は中心をやや外れた位置が盛り上がっている他の土坑にはない特徴を有している。規模は長径1.65m、短径0.93m、深度0.30mを測る。なお、坑内からの土器類など遺物の出土はない。

第14号土坑

d-3区に位置し、第5号溝状遺構の北側に近接している。

平面形は、上縁部については不整楕円形、坑底部は楕円形を呈している。坑底の状態は、わずかに弧を描いている。壁は、やや開きながら緩やかに立ち上がっている。規模は長径0.84m、短径0.55mを測る。深度は0.12mと浅い。遺物の出土はない。

第15号土坑

d-4区にあり、第6号溝状遺構北東部に隣接した位置関係を取る。平面形は上縁部・坑底部ともに不整円形を呈している。壁は緩やかに立ち上がっている。規模は長径0.93m、短径0.79m、深度0.25mを測る。坑内からの遺物の出土はない。

第16号土坑

d-2区に位置して検出された。

平面形は上縁・坑底ともに隅丸方形を呈し、その規模は、長径1.19m、短径1.17m、深度0.23mを測る。坑底部にはわずかに起伏がみられる。壁はなだらかに立ち上がりていく。遺物の出土はない。

第17号土坑

c-5区にあり第18号土坑と直列したセット関係にあるものである。

平面形は上縁・坑底ともに不整長楕円形を呈する。坑底は平坦である。壁は、西方は底面近くは垂直に上縁部に近くにつれて朝顔状に開口していく。これと違って東方では角度がやや緩く立ち上がる傾向をみせる。規模は長径1.92m、短径0.56m、深度0.46mを測る。遺物は皿が2点完形に近い状態で出土している。当土坑の性格は第18号土坑とともに遺物の出土状況などから墓坑として使用された可能性が高い。

第18号土坑

c-5、d-5区にあり、第17号土坑と直列した関係を持つ。

調査区端部より検出されたため全体の1/4程しか確認されていないが、おおよそ第17号土坑と同形状の不整長楕円形を呈するものと推定できる。坑底はわずかに傾斜が感じられるがほぼ平坦といって差し支えない程度である。壁の基本形は垂直に近い立ち上がりといって良いだろうが北側ではオーバーハングがみられる。規模は短径0.65m、深度0.40mを測る。坑内からは土器片が1点出土しているが図示できるものではない。

第19号土坑

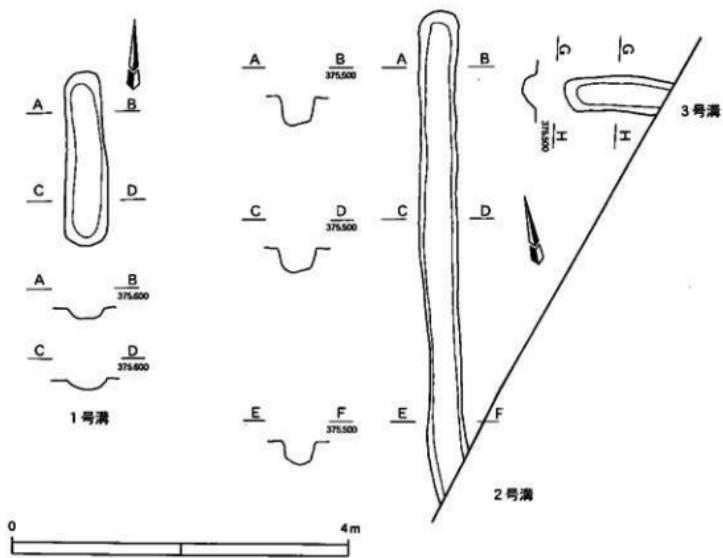
c-5区において確認された。

平面形は上縁・坑底ともに正円形に近い形状を呈している。坑底は平坦で、壁は垂直に近い立ち上がりをみせる。規模は長径0.86m、短径0.80m、深度0.32mを測る。北側壁際から自然石が検出されたほか遺物の出土はなかった。

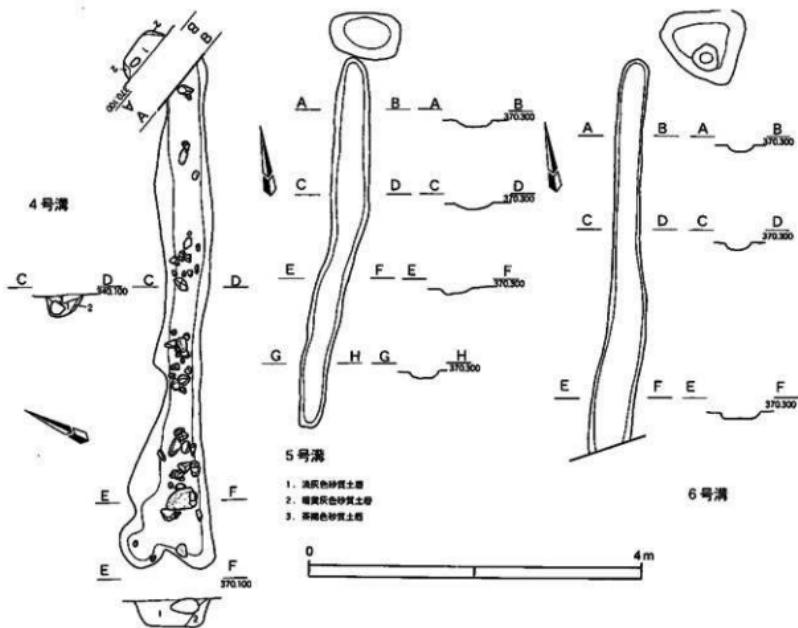
第20号土坑

c-6区に位置している。

平面形は上縁・坑底ともに円形に近い。坑底の形状は平坦である。壁は西側では急角度で立ち上がるが東側ではなだらかな角度で開口していく。規模は長径0.64m、短径0.56m、深度0.15mを測る。坑内からは自然石のほ



第30図 第1～3号溝状造構



第31図 第4～6号溝状造構

か土器が1点出土しているが図示し得るものではない。

第4節 溝状遺構

第1号溝状遺構

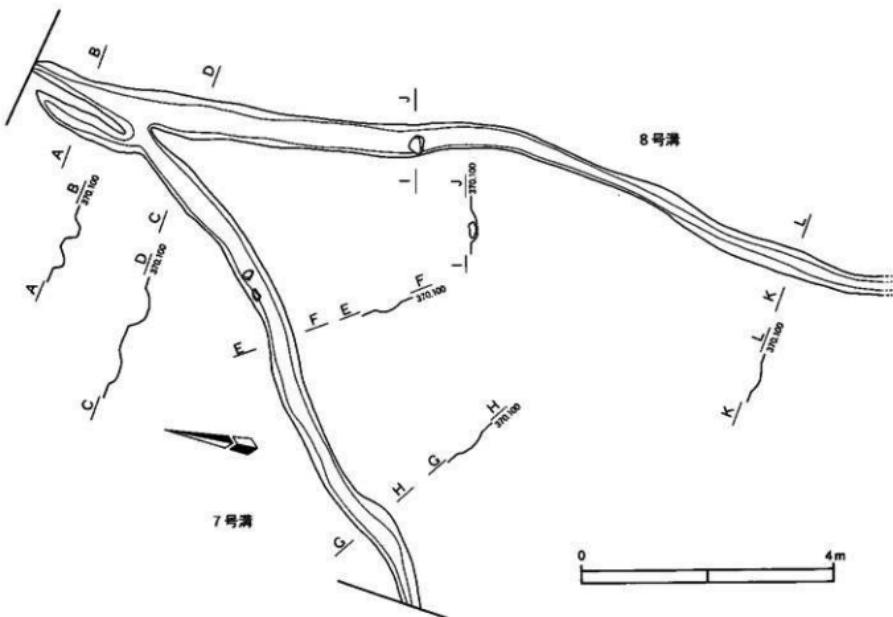
調査区北端部のC-2区に存在する。南北方向に走り、現長約2.09mを測る。また、幅は平均約0.46m、深度約0.13mを測る。遺物の出土はない。

第2号溝状遺構

C-5・6区より検出された。近接した位置に第3号溝状遺構がある。南側は調査区外のため明らかにし得なかつたが、その全容は直線に延びるものと考えられる。現長は約5.88m、幅約0.44m、深度約0.30mを測る。遺物の出土はない。

第3号溝状遺構

C-5区の第2号溝状遺構に直角になる位置より検出された。その大半は調査区外にあるため全容は明らかにし得ないが、ほぼ垂直に延びていくものと理解されよう。現長約1.30m、幅約0.42m、深度約0.15mを測る。遺物の出土はない。



第32図 第7・8号溝状遺構

第4号溝状造構

d-3区より検出され北側は調査区外に延びる。現長はおよそ6.11m、幅0.45~1.10m、深度約0.35mを測る。南端部は擾乱を受けたため依存状態が悪い。底部全体にはこぶし大から人頭大の礫が混入している。覆土は3層に分層できる。遺物は手づくね土器の胸部下半が1点出土したのみである。

第5号溝状造構

d-3区から検出された。14号土坑と近接した位置にある。現長は4.44m、幅0.34~0.45m、深度0.08mを測る。ほぼ中央部でわずかに屈曲している。近接した14号土坑との関係は判らない。遺物の出土は認められなかった。

第6号溝状造構

d-4・5区より検出され南部分は調査区外に直線的に消える。近接した位置に15号土坑があるが双方の関わりについては判らない。現長約4.63m、幅0.32~0.50m、深度0.08mを測る。なお、遺物の出土は無い。

第7号溝状造構

a-3区およびb-2・3区に跨って検出された。北東端部近くで第8号溝状造構と結線し方向を北寄りに変化させる。全体の様子は直線とは言い難く蛇行しながら南西方向に向かい調査区外に消える。現長は約10.44m、幅0.38~0.52m、深度約0.10mを測る。遺物の出土はなかった。

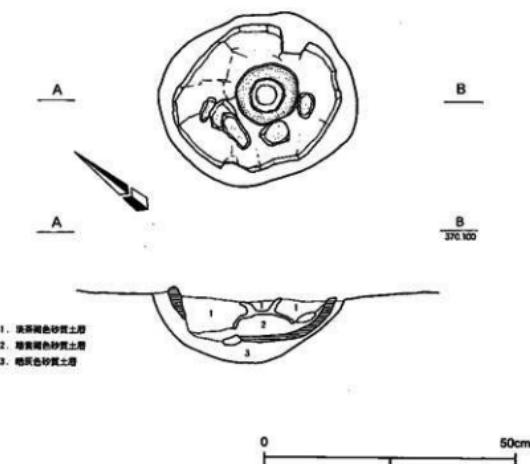
第8号溝状造構

b-3・4・5区に位置し北端部付近で第7号溝状造構と接触する。大きく蛇行しながら南方に向かい深度を浅くしながら途切れてしまう。現長は約13.80m、幅0.32~0.66m、深度0.18~0.08mを測る。なお、遺物の出土は認められなかった。

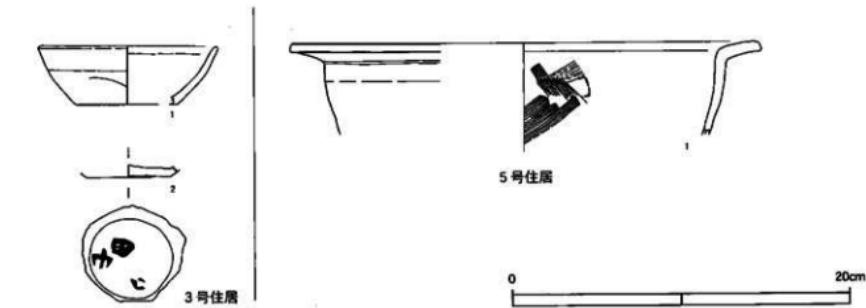
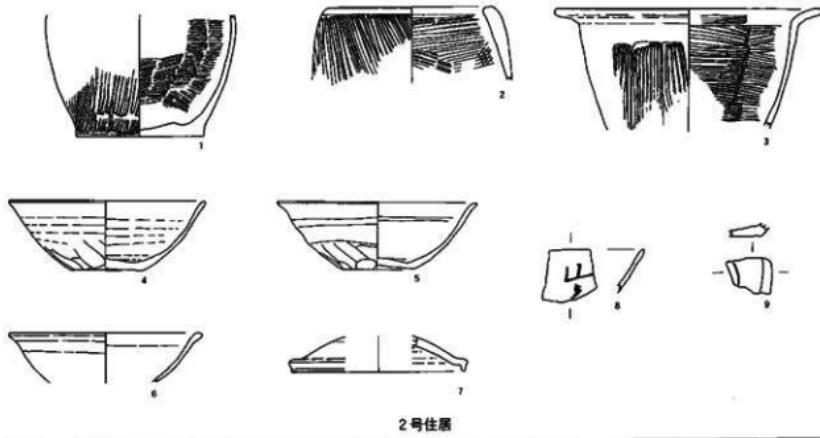
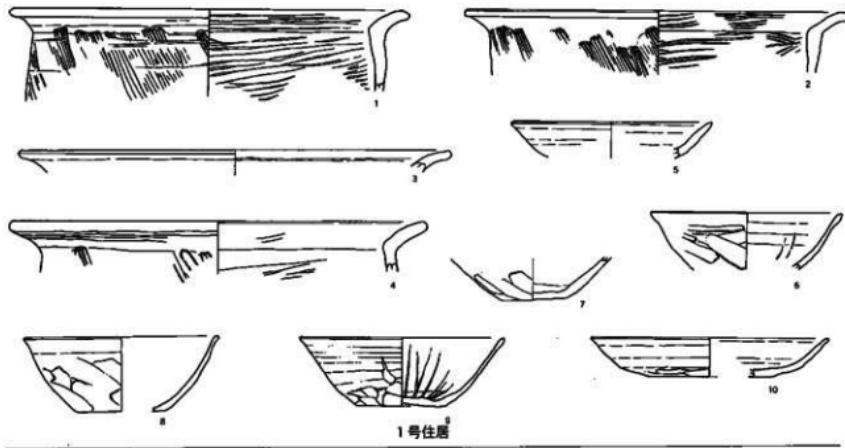
第5節 その他の造構

埋納造構

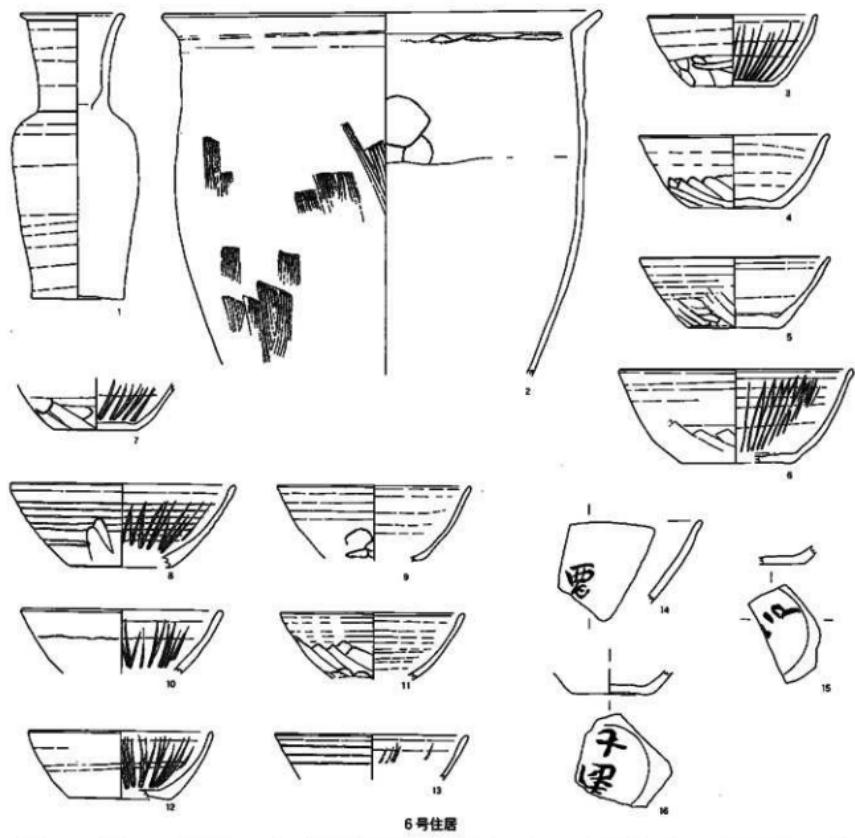
b-4区から検出された。当造構は平成13年度の調査で検出されたもので、長径0.75m、短径0.67mの不整梢円形状の平面形を呈し、深度は0.27mを測る。検出時の状況はポール状に掘り込まれた浅いピットの底面に3cm厚の精製した黄褐色粘質土を均一に貼り付けている。なお、この黄褐色粘質土は遺跡周辺に存在する土壤ではなく他所から採取し持ち込まれたものである。さらに、その中に10世紀末~11世紀前葉と推される脚高高台皿を逆位に設置しその周囲に直径10cm前後の円碟を13個置き、その隙間に薄茶褐色砂質土と暗黄褐色砂質土を充填させていく。周囲には類似した特殊な造構ではなく単独で構築されたものである。構築時期はおよそ10世紀末から11世紀前葉であろう。



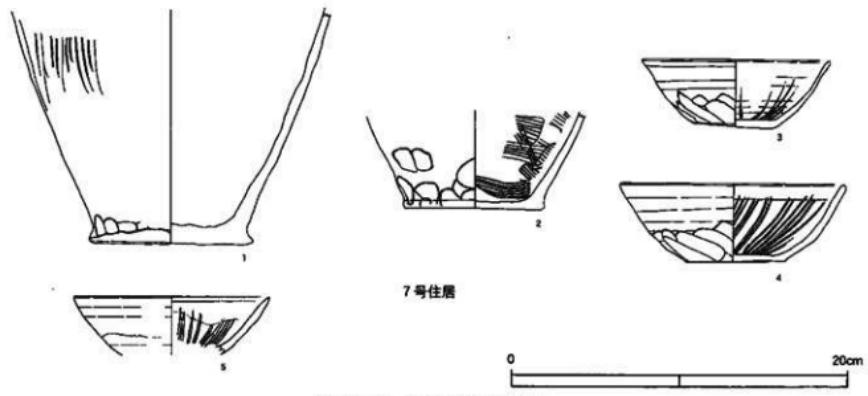
第33図 埋納造構



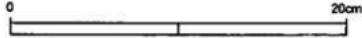
第34図 出土遺物実測図 1



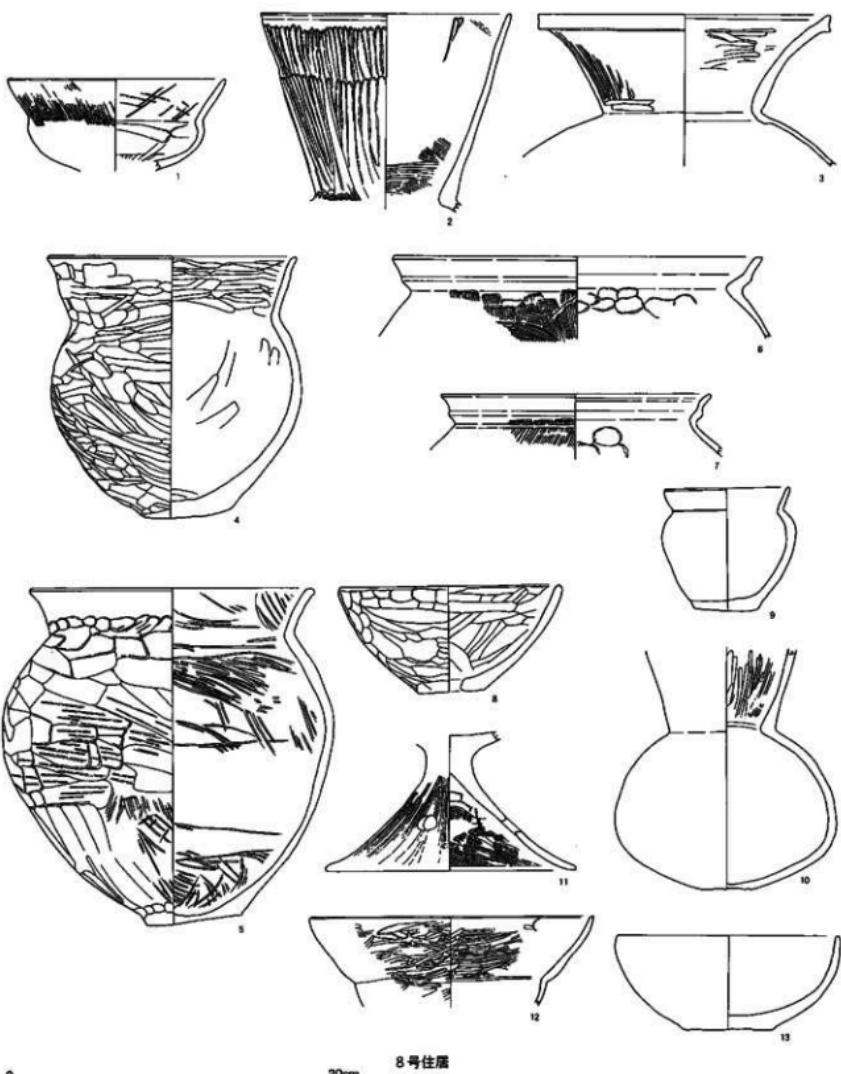
6号住居



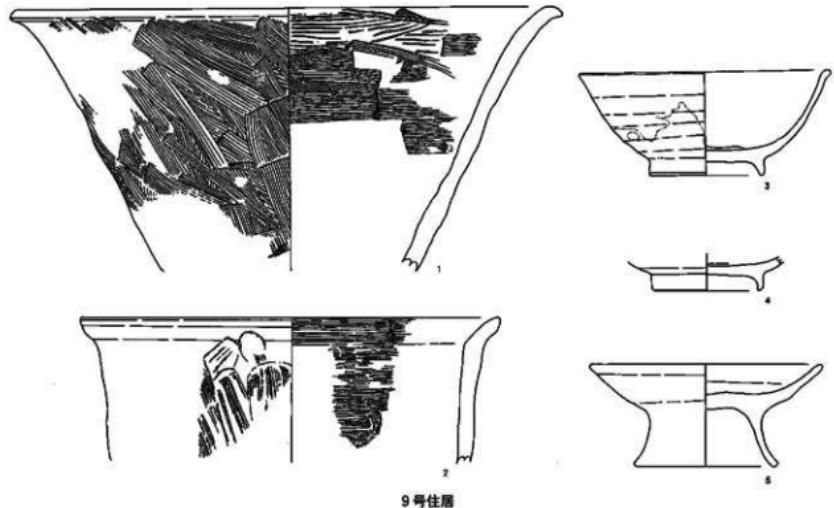
7号住居



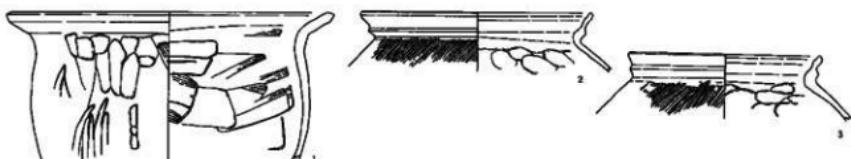
第35図 出土遺物実測図2



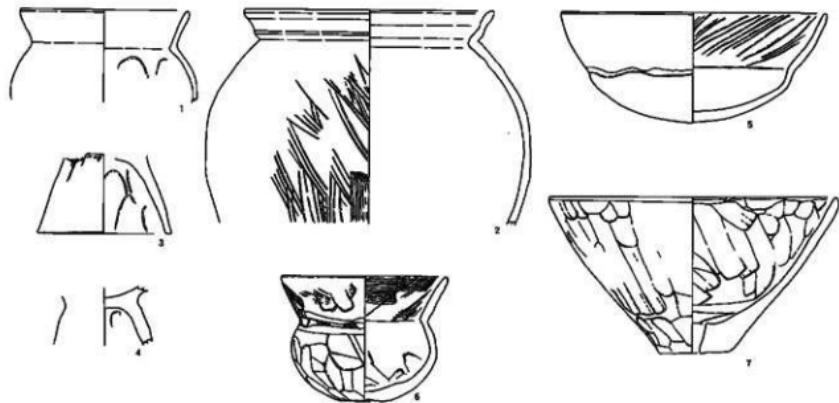
第36図 出土遺物実測図3



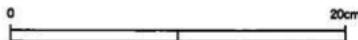
9号住居



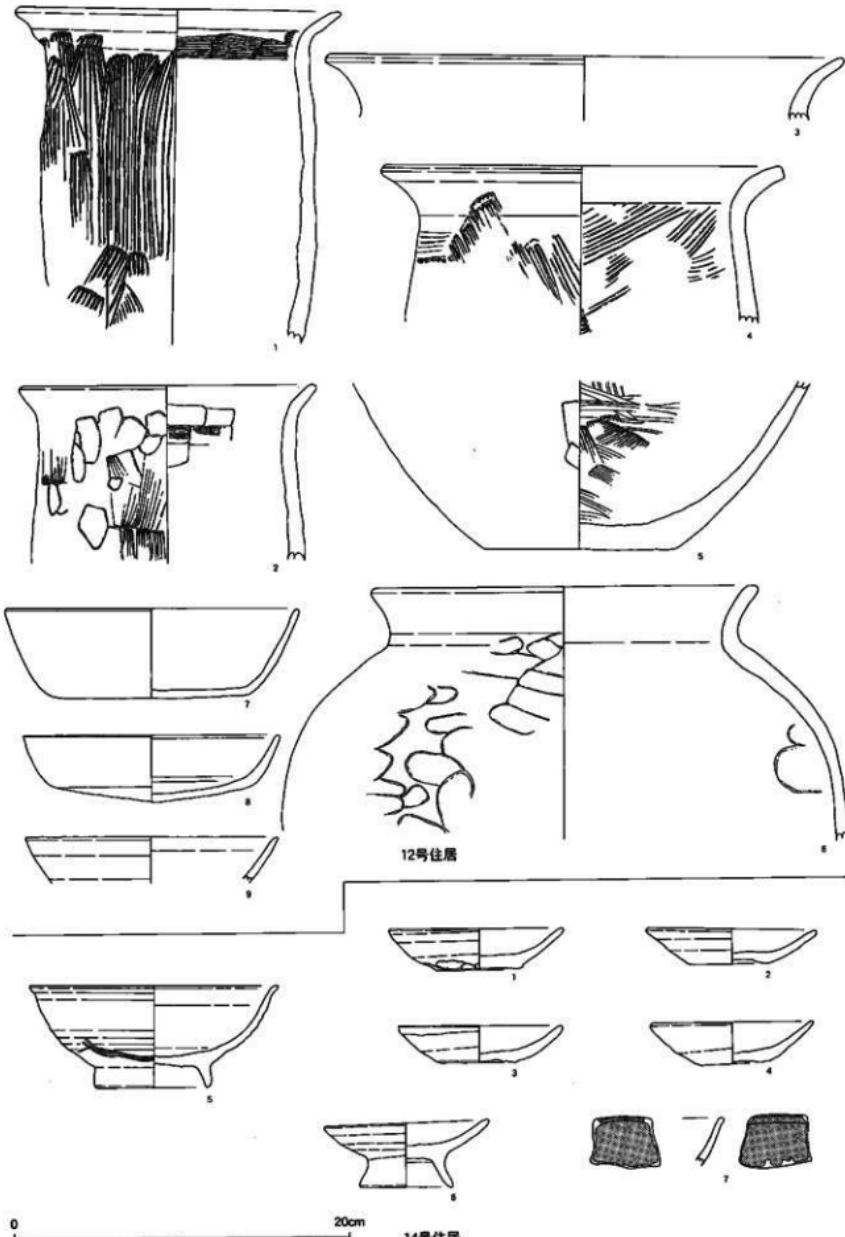
10号住居



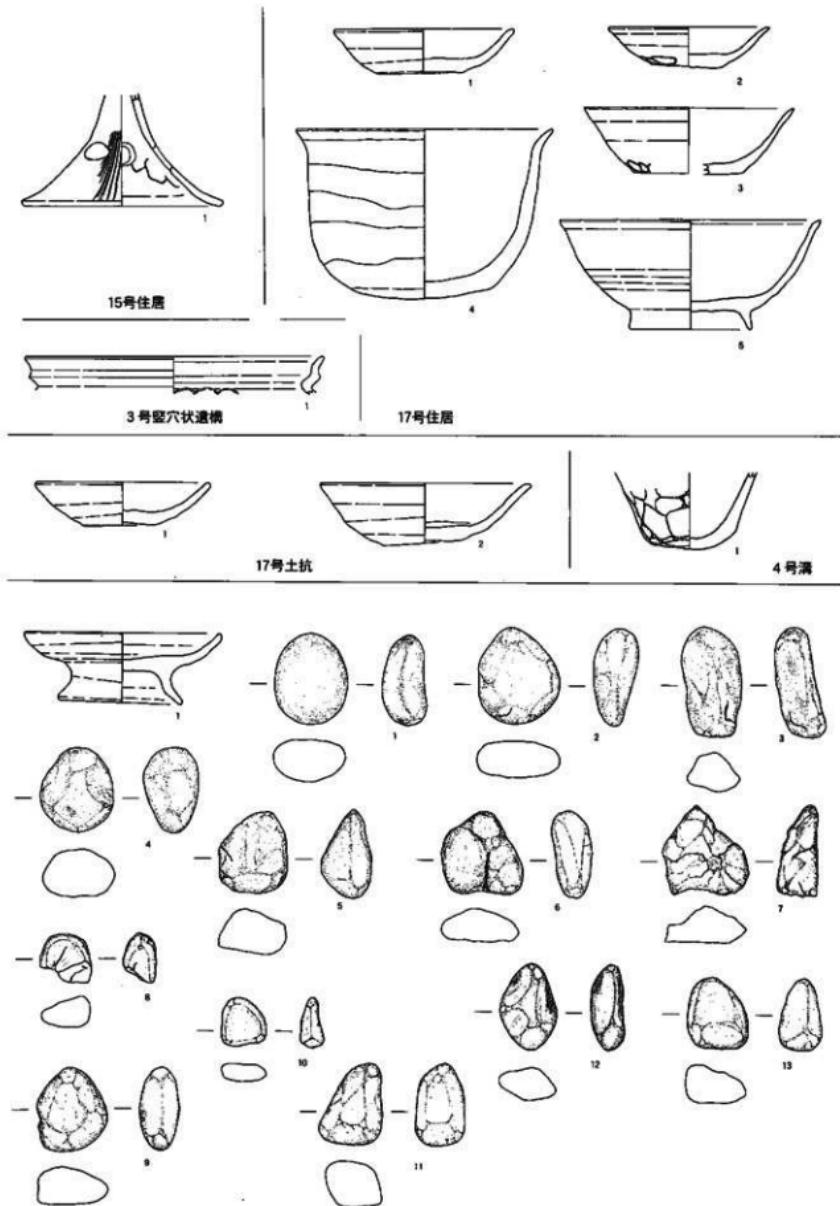
11号住居



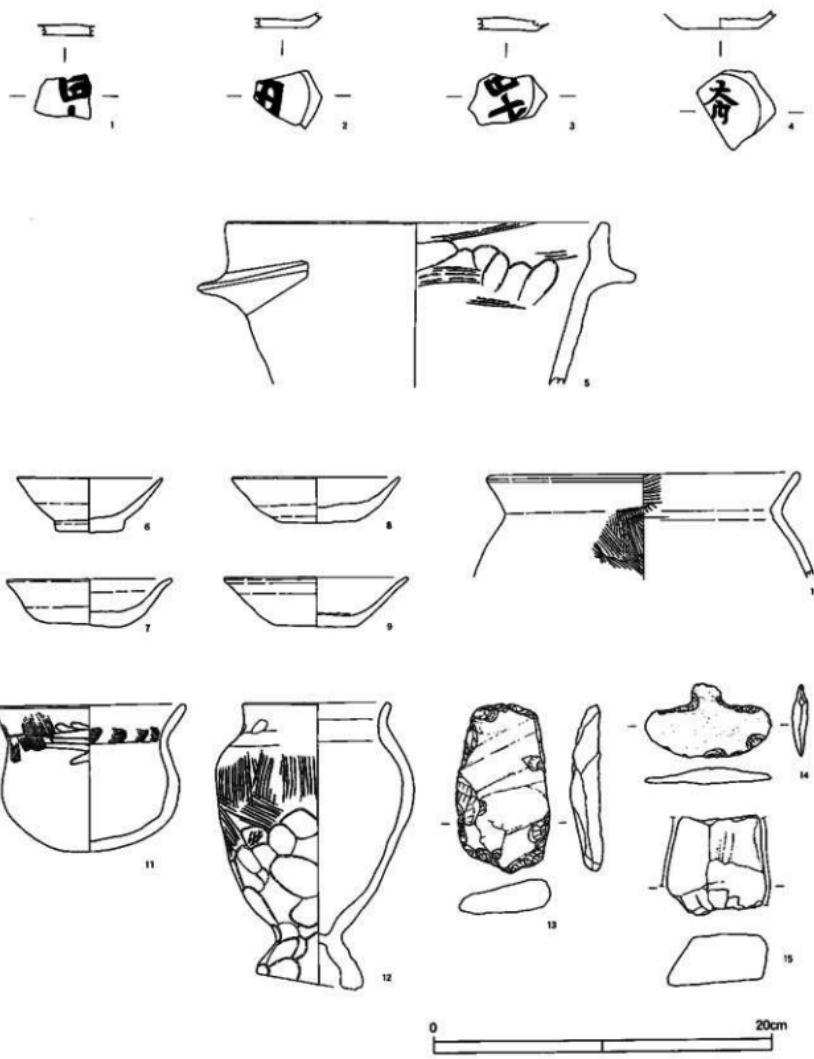
第37図 出土遺物実測図4



第38図 出土遺物実測図5



第39図 出土遺物実測図6



第40図 造横外出土遺物実測図

第5章 まとめ

調査の結果については既述のとおりであるが、ここでは若干の取りまとめを行ってみたい。

五反田遺跡は平成10年度に実施された試掘調査によって調査区南側から古墳時代前期の集落の存在が外郭として捉えられていた。しかしながら、調査区ほぼ中央の標高約372m周辺から平安時代の集落の一端が発見され、試掘調査結果に加えてややボリュームのある遺跡であることが判明した。

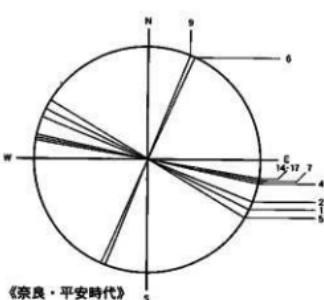
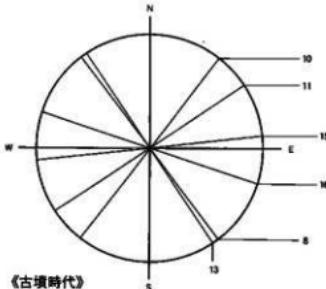
《古墳時代前期》

当遺跡においては45%の割合を占めるものが古墳時代前期の住居跡・竪穴状遺構である。調査により検出された実数は住居跡6軒（8・10・11・13・15・16号住居跡）、竪穴状遺構3基である。集落は、遺跡分布図や地形等の検討から調査対象地の東側に展開するものと推測でき当該地は遺跡の西端部にあたると考えてよからう。構築された時期はすべてがおおよそ古墳時代前期の五段階と理解できるものである。

主軸方位は北東～南東側（N-38° -E-N-18° -S）を指す。これは現在の等高線に対し大まかに直行する様相を呈している。しかし、隣接する西田遺跡のような統一性のある方向は求められない。これは資料数の違いからなのか現段階での判断は難しい。

《奈良・平安時代》

五反田遺跡においては17軒の住居跡が検出され、そのうちの11軒が奈良・平安時代に属するものである（1～7・9・12・14・17号住居跡）。これらは調査対象地のほぼ全域に散在的に分布している。主軸方位は北寄りの第6・9号住居跡と東南東にとるもの（1・2・4・5・7・14・17）に大別できる。このように当遺跡の集落がほぼ二方の主軸方位をとるより方は本集落の強い特徴のひとつにあげられ、同一の集団的規制が加わることが強く感じられるものである。構築された時期については大きく5つに分けることが出来る。最古段階に位置付けられるものとして甲斐型土器出現前の8世紀前半代にあたる12号住居跡があげられる。続いて第2段階として8世紀後半と推される1・3号住居跡、第3段階（9世紀第2～3四半世紀）に2・5・6・17号住居跡、第4段階として7号住居跡が当て嵌められる。時期は9世紀後半としておきたい。最終段階は第4段階との間隙が大きく11世紀代にあたる9・14号住居跡があげられる。厳密に言えば9号住居跡が11世紀前半、14号住居跡が11世紀前葉から後葉の特徴を色濃く持っていると考えられる。



第41図 住居跡主軸方位

出土遺物計測表

第1号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	裏面					
1	壺	22.90	23.85				刷毛	刷毛		粗	やや軟質	茶褐色	口縁のみ
2	壺	22.30	22.75				刷毛	刷毛		やや粗	やや軟質	赤茶褐色	口縁のみ
3	壺	25.40	25.90							粗	やや軟質	茶褐色	口縁のみ
4	壺	24.00	24.40				刷毛	刷毛		粗	軟質	暗茶褐色	口縁のみ
5	壺	11.65	11.90							やや粗	やや軟質	乳茶褐色	1/7残
6	壺	11.20	11.35				ナデ 茶削り	暗文		やや粗	やや軟質	乳茶褐色	1/4残
7	壺			4.40			ナデ 茶削り	ナデ	茶削り	やや粗	やや軟質	明茶褐色	1/4残
8	壺	11.40	11.68	4.35			ナデ 茶削り	ナデ		やや粗	良好	乳茶褐色	1/4残
9	壺	12.10	12.28	4.04	5.23	3.48	ナデ 茶削り	暗文	茶削り	やや粗	良好	乳茶褐色	1/4残
10	壺	14.00	14.05	2.32	7.25	1.90	ナデ 茶削り	ナデ		やや粗	良好	乳茶褐色	1/3残

第2号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	裏面					
1	壺					7.60	刷毛	刷毛	粗	軟質	茶褐色	3/4残	
2	壺	9.60					刷毛	刷毛	やや粗	やや軟質	茶褐色	1/4残	
3	鉢	15.55	15.75				刷毛	刷毛	やや粗	やや軟質	暗茶褐色	1/10残	
4	壺	11.65	11.70	4.10	4.85	3.40	ナデ 茶削り	ナデ	茶削り	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	1/4欠
5	壺	11.70	11.95	4.00	4.30	3.60	ナデ 茶削り	ナデ		粗	軟質	乳茶褐色	1/3残
6	壺	11.10	11.50				ナデ 茶削り	ナデ		密	良好	明茶褐色	1/4残
7	壺蓋	10.30	10.65				ナデ	ナデ		密	良好	暗灰色	1/7残 須復
8	壺						ナデ 茶削り	ナデ		密	良好	茶褐色	口縁のみ 売書
9	壺						ナデ	ナデ		密	良好	茶褐色	底部のみ 売書

第3号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	裏面					
1	壺	10.50	12.00				ナデ 茶削り	ナデ		密	やや軟質	明茶褐色	1/8残
2	壺					4.87	ナデ	暗文	回転糸切	密	やや軟質	明茶褐色	底部のみ 売書

第5号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	裏面					
1	壺	27.70	27.98				刷毛	刷毛		粗	良好	赤茶褐色	1/20残

第6号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部 表面	裏面					
1	壺	5.75	7.42	17.00	5.60	16.55	ナデ	ナデ	回転糸切	密	良好	暗黒褐色	充存 須復 G
2	壺	25.65	26.05				刷毛	ナデ		密	軟質	茶褐色	脚部上半
3	壺	9.90	10.10	4.20	4.90	3.85	ナデ 茶削り	暗文	回転糸切	密	やや軟質	淡乳茶褐色	ほぼ完存
4	壺	11.10	11.30	4.25	5.30	3.68	ナデ 茶削り	ナデ	回転糸切	やや密	やや軟質	明茶褐色	2/3残

5	坏	11.15	11.30	4.15	4.55	3.35	ナデ 鮫削り	ナデ	回転糸切	密	やや軟質	暗乳茶褐色	1/5残	
6	坏	13.75	13.95	5.50		5.10	ナデ 鮫削り	暗文		密	良好	明茶褐色	1/5残	
7	坏				4.95		ナデ 鮫削り	暗文	回転糸切	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	1/4残	
8	坏	13.10	13.30	4.90			ナデ 鮫削り	暗文		やや粗	やや軟質	暗茶褐色	1/4残	
9	坏	11.50	11.80				ナデ	暗文		密	やや軟質	明茶褐色	1/6残	
10	坏	11.70	11.90				ナデ 鮫削り	暗文		やや粗	やや軟質	明茶褐色	1/4残	
11	坏	10.85	11.00				ナデ 鮫削り	ナデ		密	やや軟質	乳茶褐色	1/4残	
12	坏	10.75	10.90	3.90	5.98	3.50	ナデ 鮫削り	暗文	回転糸切	密	良好	淡茶褐色	1/5残	
13	坏	11.30	11.50				ナデ	暗文		やや粗	やや軟質	明茶褐色	1/4残	
14	坏						ナデ	暗文		密	やや軟質	乳茶褐色	1/4残	墨書
15	坏						ナデ	暗文	回転糸切	密	良好	淡茶褐色	底部1/2	墨書
16	坏						ナデ	暗文	回転糸切	密	やや軟質	茶褐色	底部1/3	墨書

第7号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考				
		口径	最大 径	器高	底脚 径	内深	器体部										
							表面	裏面	底部								
1	豆					7.60	刷毛	刷毛	木葉痕	やや粗	やや軟質	茶褐色	脚部下半				
2	豆					9.60		刷毛	木葉痕	やや粗	やや軟質	暗茶褐色	底部残				
3	坏	15.55	15.75	15.75	15.75	15.75	ナデ 鮫削り	暗文	鮫削り	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	5/6残				
4	坏	11.65	11.70	4.10	4.85	3.40	ナデ 鮫削り	暗文		やや粗	やや軟質	淡乳茶褐色	ほぼ完存				
5	坏	11.70	11.95				ナデ	暗文		密	やや軟質	暗乳茶褐色	1/6残				

第8号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考				
		口径	最大 径	器高	底脚 径	内深	器体部										
							表面	裏面	底部								
1	高坏	12.80	12.95				刷毛	瓦磨き		密	やや軟質	茶褐色	脚部欠				
2	培	14.75					瓦磨き	刷毛	瓦磨き		やや粗	やや軟質	明茶褐色	4/5残			
3	豆	17.20					瓦磨き	瓦磨き		やや粗	良好	暗乳茶褐色	1/3残				
4	豆	14.60	14.88	15.40	5.28	14.38	瓦磨き	瓦磨き	ナデ	密	良好	暗茶褐色	1/5欠				
5	豆	16.50	19.60	20.10	5.75	19.45	刷毛	刷毛	瓦磨き	やや粗	良好	暗茶褐色	1/3欠				
6	台付豆	21.40					刷毛	ナデ 鮫削瓦磨		やや粗	良好	暗茶褐色	口縁のみ	S字			
7	台付豆	15.70					刷毛	ナデ 鮫削瓦磨		やや粗	やや軟質	暗茶褐色	口縁のみ	S字			
8	豆	13.00	13.35	6.40	4.10	5.50	瓦磨き	瓦磨き	ナデ	密	良好	暗乳茶褐色	ほぼ完存				
9	豆	7.80	8.95	7.22	3.55	6.56	ナデ	ナデ	ナデ	密	良好	黒褐色	1/2残				
10	小型丸底					2.90	刷毛	瓦磨き	ナデ	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	口縁欠				
11	器台						瓦磨き	刷毛		密	良好	茶褐色	脚部3/4残				
12	鉢	16.90	16.95				瓦磨き	瓦磨き	ナデ	密	良好	赤茶褐色	1/5残				
13	坏	13.00	13.22	5.55	5.50	4.70	ナデ	ナデ	ナデ	密	やや軟質	乳茶褐色	1/3欠				

第9号住居跡

番号	器種	法 量 (cm)				調 整			胎土	焼成	色調	残存状況	備考				
		口径	最大 径	器高	底脚 径	内深	器体部										
							表面	裏面	底部								
1	鉢	31.70	32.90				刷毛	刷毛		やや粗	やや軟質	暗茶褐色					
2	豆	24.50	25.00				刷毛	刷毛		やや粗	やや軟質	黒褐色	口縁のみ				

3	灰輪面	14.55	14.90	6.10	6.97	4.80	ナデ	ナデ	回転糸切	密	良好	灰色	2/3残	
4	灰輪面				6.86		ナデ	ナデ	回転糸切	密	良好	灰色	底部残	
5	脚底 高台面	13.50	13.75	6.00	7.93	1.75	ナデ	ナデ	ナデ	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	3/4残	

第10号住居跡

番号	器種	法量(cm)					調査			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部		底部					
							裏面	外面	底部					
1	壺	18.70	19.40				荒廢き	刷毛		やや粗	やや軟質	茶褐色	1/4残	
2	台付壺	13.65					刷毛	ナデ		やや粗	やや軟質	乳茶褐色	口縁のみ	S字
3	台付壺	11.10					刷毛	ナデ	指頭圧痕	やや粗	やや軟質	茶褐色	口縁のみ	S字

第11号住居跡

番号	器種	法量(cm)					調査			粘土	焼成	色調	残存状況	備考	
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部		底部						
							裏面	外面	底部						
1	壺	9.80	10.00				荒廢き	荒廢き		やや粗	やや軟質	暗茶褐色	1/3残		
2	台付壺	14.80	19.45				櫛縫	ナデ		やや粗	やや軟質	赤茶褐色	1/5残	S字	
3	台付壺						刷毛	ナデ	指頭圧痕	やや粗	良好	赤茶褐色	脚部残		
4	台付壺						指頭圧痕			粗	やや軟質	赤茶褐色	脚部残		
5	鉢	15.50	15.80	6.50		5.80	荒廢き	荒廢き		やや粗	やや軟質	暗茶褐色	ほぼ完存		
6	壺	9.80	10.00	7.50	2.76	6.90	刷毛	荒廢き	刷毛・繪文	ナデ	やや粗	やや軟質	暗乳茶褐色	完存	
7	壺	16.90	17.15	9.25	4.14	7.25	荒廢き	刷毛	指頭圧痕	ナデ	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	ほぼ完存	

第12号住居跡

番号	器種	法量(cm)					調査			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部		底部					
							裏面	外面	底部					
1	壺	18.90	19.40				刷毛	刷毛		やや粗	やや軟質	暗茶褐色	1/3残	
2	壺	17.10	17.65				刷毛	ナデ	指頭圧痕	やや粗	やや軟質	茶褐色	1/5残	
3	壺	30.30	30.90				刷毛	刷毛		やや粗	良好	乳茶褐色	口縁のみ	
4	壺	23.20	24.00				刷毛	刷毛		粗	やや軟質	茶褐色	1/3残	
5	壺				11.15		刷毛	刷毛		やや粗	やや軟質	暗茶褐色	1/4残	
6	壺	22.20	33.05				指頭圧痕	指頭圧痕		粗	軟質	乳茶褐色	2/5残	
7	壺	17.20	17.50	5.30	11.64	4.80	荒廢き	荒廢き	荒廢き	密	やや軟質	乳茶褐色	1/10残	
8	壺	15.10	15.20	3.95	10.71	3.45	荒廢き	荒廢き	荒廢き	やや粗	やや軟質	明茶褐色	1/3残	
9	壺	14.90	15.05				ナデ	ナデ		密	良好	暗乳茶褐色	口縁のみ	

第14号住居跡

番号	器種	法量(cm)					調査			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	器高	底部径	内深	器体部		底部					
							裏面	外面	底部					
1	小皿	10.25	10.40	2.35	5.03	1.65	ナデ	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	暗乳茶褐色	ほぼ完存	
2	小皿	9.95	10.10	2.00	4.40	1.40	ナデ	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	ほぼ完存	
3	小皿	9.65	9.80	2.20	4.65	1.85	ナデ	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	暗乳茶褐色	ほぼ完存	
4	小皿	9.45	9.60	2.50	4.52	1.30	ナデ	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	暗乳茶褐色	ほぼ完存	
5	灰輪面	14.60	14.80	6.10	7.00	4.20	ナデ	ナデ	回転糸切	密	良好	灰色	1/5残	

6	高台皿	9.75	9.90	4.00	5.60	1.30	ナデ	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	ほぼ完存	
7	瓶											淡灰色	1/10残	難

第15号住居跡

番号	器種	法 尺 (cm)					調 整			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	基高	底部径	内深	器体部	表面	裏面					
1	器台				11.58		荒磨き	指頭圧痕		やや粗	やや軟質	茶褐色	脚部残	

第17号住居跡

番号	器種	法 尺 (cm)					調 整			粘土	焼成	色調	残存状況	備考	
		口径	最大径	基高	底部径	内深	器体部	表面	裏面						
1	壺	10.60	10.80	2.60	4.71	1.80	ナデ	ナデ	回転糸切	粗	軟質	乳茶褐色	完存		
2	壺	9.35	9.50	2.44	4.27	1.62	ナデ	指頭圧痕	ナデ	回転糸切	粗	軟質	明茶褐色	1/3残	
3	壺	12.35	12.40	3.90			ナデ	指頭圧痕	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	暗乳茶褐色	1/5残	
4	壺	15.30	15.40	10.00	8.11	9.00	ナデ	ナデ	木壓痕	やや粗	やや軟質	茶褐色	3/4残	小型	
5	灰陶碗	15.20	15.40	6.40	7.31	4.80	ナデ	ナデ	回転糸切	密	良好	淡灰色	1/5残		

第3号竪穴状遺構

番号	器種	法 尺 (cm)					調 整			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	基高	底部径	内深	器体部	表面	裏面					
1	台付壺	17.50					ナデ	ナデ	指頭圧痕	やや粗	やや軟質	明茶褐色	口縁のみ	S字

第17号土坑

番号	器種	法 尺 (cm)					調 整			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	基高	底部径	内深	器体部	表面	裏面					
1	壺	10.00	10.40	2.50	4.23	1.75	ナデ	ナデ	回転糸切	粗	やや軟質	乳茶褐色	4/5残	
2	壺	12.20	12.70	3.40	5.23	2.60	ナデ	ナデ	回転糸切	やや粗	やや軟質	乳茶褐色	4/5残	

第4号溝状遺構

番号	器種	法 尺 (cm)					調 整			粘土	焼成	色調	残存状況	備考
		口径	最大径	基高	底部径	内深	器体部	表面	裏面					
1	手づく ねじ付				5.07		指頭圧痕	ナデ		粗	良好	暗乳茶褐色	1/2残	

出土遺物注記番号表

第1号住居跡

番号	器種	注記番号
1	甕	00GT1住P-11・24・25
2	甕	00GT1住P-10・26 00GT1住 00GT1住カマド
3	甕	00GT1住 00GT1住カマド
4	甕	00GT1住 00GT1住カマド
5	环	00GT1住P-21 00GT1住
6	环	00GT1住
7	环	00GT1住P-1
8	环	00GT1住
9	环	00GT1住P-5
10	皿	00GT1住

第2号住居跡

番号	器種	注記番号
1	甕	00GT2住P-18 00GT2住
2	甕	00GT2住P-3 00GT2住
3	鉢	00GT2住P-19 00GT2住カマド
4	环	00GT2住P-22 00GT2住
5	环	00GT2住P-21 00GT2住
6	环	00GT2住P-24 00GT2住
7	环盤	00GT2住
8	环	00GT2住
9	环	00GT2住

第3号住居跡

番号	器種	注記番号
1	环	00GTB-21
2	环	00GT3住

第5号住居跡

番号	器種	注記番号
1	甕	00GT5住カマド

第6号住居跡

番号	器種	注記番号
1	甕	00GT6住P-27
2	甕	00GT6住P-2・8・17・18・25・28~31 00GT6住床 他
3	环	00GT6住P-37 00GT6住床
4	环	00GT6住P-34 00GT6住
5	环	00GT6住P-14 00GT6住
6	环	00GT6住P-36
7	环	00GT6住P-24 00GT6住
8	环	00GT6住P-21
9	环	00GT6住
10	环	00GT6住
11	环	00GT6住P-23
12	环	00GT6住
13	环	00GT6住
14	环	00GT6住
15	环	00GT6住
16	环	00GT6住

第7号住居跡

番号	器種	注記番号
1	甕	00GT7住P-13・14・15・16・17・18・19 00GT7住カマド

番号	器種	注記番号
2	壺	00GT7住P-20・21 00GT7住
3	环	00GT7住P-24
4	环	00GT7住P-23・25
5	环	00GT7住

第8号住居跡

番号	器種	注記番号
1	高杯	00GT8住P-11・12・14・16
2	壺	00GT8住P-1・2 00GT8住
3	釜	00GT8住P-7・8 00GT8住
4	壺	00GT8住P-20
5	壺	00GT8住P-10
6	台付壺	00GT8住
7	台付壺	00GT8住
8	瓶	00GT8住P-17
9	壺	00GT8住P-21 00GT8住
10	小型丸底	00GT8住P-18 00GT8住
11	器台	00GT8住P-13・15 00GT8住
12	鉢	00GT8住P-19
13	环	00GT8住P-5

第9号住居跡

番号	器種	注記番号
1	鉢	00GT9住P-3・4・6・7 00GT9住カマド
2	壺	00GT9住カマド
3	灰釉壺	00GT9住P-11・12・13
4	灰釉壺	00GT9住P-14
5	腰高 高台盤	00GT9住P-1・2

第10号住居跡

番号	器種	注記番号
1	壺	00GT10住P-11 00GT10住
2	台付壺	00GT10住P-14
3	台付壺	00GT10住P-3

第11号住居跡

番号	器種	注記番号
1	壺	00GT11住P-10 00GT11住
2	台付壺	00GT11住P-16
3	台付壺	00GT11住P-6 00GT11住
4	台付壺	00GT11住P-4
5	鉢	00GT11住P-17
6	壺	00GT11住P-5
7	瓶	00GT11住P-18

第12号住居跡

番号	器種	注記番号
1	壺	B-39 00GT13住P-6
2	壺	B-39 00GT13住P-14・15 00GT13住カマド 他
3	壺	B-39 00GT13住P-34
4	壺	B-39 00GT13住P-18・19・22・24・29 他
5	壺	B-39 00GT13住P-7
6	壺	B-39 00GT13住P-10・36
7	环	B-39・40 00GT13住P-2～13・28
8	环	B-39 00GT13住P-31・32 00GT13住

番号	器種	注記番号
9	环	00GT13住

第14号住居跡

番号	器種	注記番号
1	小皿	01GT 2 住P-7
2	小皿	01GT 2 住P-6
3	小皿	01GT 2 住P-21
4	小皿	01GT 2 住P-8
5	灰釉碗	01GT 2 住P-4
6	脚高 高台皿	01GT 2 住P-9
7	灰釉碗	01GT 2 住P-11

第15号住居跡

番号	器種	注記番号
1	器台	01GT 3 住P-11 01GT 2 住

第17号住居跡

番号	器種	注記番号
1	坏	01GT 5 住 P-31
2	坏	01GT 5 住 P-29
3	坏	01GT 5 住 P-24 01GT 5 住
4	匣	01GT 5 住 b-5
5	灰釉碗	01GT 5 住 P-12 01GT 5 住 01GTb-5

第3号竪穴状遺構

番号	器種	注記番号
1	台付壺	00GT15住 P-1

第17号土坑

番号	器種	注記番号
1	坏	01GT 4 土コウ P-1・3
2	坏	01GT 4 土コウ P-2

第4号溝状遺構

番号	器種	注記番号
1	手づく ね土器	01GT 1 ミゾ P-9 01GT 1 ミゾ

遺構別計測表

住居跡

No.	位 置	長径(m)	短径(m)	主軸方位	床面高度(m)	備 考
1	C-22 D-22	3.68	3.65	E-26°-S	373.40	
2	C-17	3.65	3.58	E-22°-S	373.30	
3	C-17・18 D-17・18				373.60	
4	A-22-23 B-22-23	3.80		E-12°-S	373.45	
5	C-21 D-21	3.20	3.10	E-31°-S	373.50	
6	A-21-22 B-21-22			N-24°-E	372.50	
7	A-20-21 B-20-21			E-11°-S	373.15	
8	C-46 D-45・46			E-53°-S	370.70	
9	A-42-43 B-42-43	3.00	2.65	N-22°-E	371.90	
10	C-44-45 D-44-45			N-38°-E		
11	C-34-35 D-34	3.38	3.12	N-56°-E	372.20	
12	A-39 B-39-40	4.15	3.95	E-18°-S	371.65	
13	d-4 e-4			E-56°-S	369.15	
14	c-3・4	4.00	3.90	E-10°-S	370.00	
15	c-4 d-4	2.65	2.60	N-84°-E	369.90	
16	a-3・4 b-3・4	3.05	2.50	E-18°-S	369.80	
17	a-5 b-5	4.75	3.65	E-10°-S	369.60	

竪穴状遺構

No.	位 置	長径(m)	短径(m)	主軸方位	床面高度(m)	備 考
1	C-44-45	4.50	3.85	N-43°-E	371.65	
2	C-38-39	2.60	2.45	E-13°-S	371.90	
3	B-46-47 C-46	2.00	1.85	N-60°-E	371.60	

土坑

No.	位 置	長径(m)	短径(m)	深度(m)	平面形	備 考
1	C-5	1.78	1.58	0.23	正円形	
2	C-7・8	2.23	1.82	0.24	不整橢円形	
3	C-3		1.20	0.14	橢円形	
4	B-4	0.80	0.78	0.20	円形	
5	B-1・5	1.17	0.80	0.19	不整橢円形	
6	B-1・7	0.70	0.62	0.22	正円形	
7	C-2・2	0.65	0.59	0.14	円形	
8	C-1・8	1.43	1.22	0.10	不整円形	
9	B-2・2	0.89	0.75	0.11	不整円形	
10	C-4・4	1.64	0.69	0.38	隅丸艮方形	
11	C-4・0・4・1	1.27	0.61	0.66	不整橢円形	
12	A-4・3		1.34	0.31	正円形	
13	C-4・6	1.65	0.93	0.30	隅丸艮方形	
14	d-3	0.84	0.55	0.12	不整橢円形	
15	d-4	0.93	0.79	0.25	不整円形	
16	d-2	1.19	1.17	0.23	隅丸方形	
17	c-5	1.92	0.56	0.46	不整長橢円形	
18	c-5・d-5			0.65	0.40	(不整長橢円形)
19	c-5	0.86	0.80	0.32	正円形	
20	c-6	0.84	0.56	0.15	円形	

溝状遺構

No.	位 置	長径(m)	短径(m)	深度(m)	備 考
1	C-2	2.09	0.46	0.13	
2	C-5・6	5.88	0.44	0.30	
3	C-5	1.30	0.42	0.15	
4	d-3	6.11	0.45~1.10	0.35	
5	d-3	4.44	0.34~0.45	0.08	
6	d-4・5	4.63	0.32~0.50	0.08	
7	a-3 b-2・3	10.44	0.38~0.52	0.10	
8	b-3・4・5	13.80	0.32~0.66	0.18~0.08	

写 真 図 版



2000年度 完掘状況 その 1



2000年度 完掘状況 その 2



2000年度 調査区近景



2001年度 完掘状況

写真図版 2



表土剥ぎの様子 その1



表土剥ぎの様子 その2



1号住居跡・7号土坑



1号住居跡・遺物検出状況



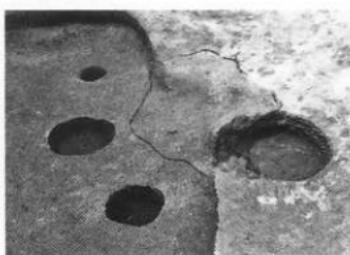
2号住居跡



2・3号住居跡



4号住居跡・9号土坑



4号住居跡・遺物検出状況



5・6・7号住居跡



8号住居跡



8号住居跡 遺物検出状況 その1



8号住居跡 遺物検出状況 その2



8号住居跡 作業風景



9号住居跡



9号住居跡 遺物検出状況

写真図版 4



10・11号住居跡



10号住居跡



11号住居跡



11号住居跡 遺物検出状況 その1



11号住居跡 遺物検出状況 その2



12号住居跡



13号住居跡



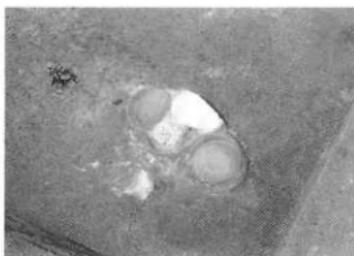
13号住居跡 遺物検出状況



14・15号住居跡



14号住居跡 遺物検出状況 その 1



14号住居跡 遺物検出状況 その 2



14号住居跡 遺物検出状況 その 3



15号住居跡 遺物検出状況

写真図版 6



16号住居跡



17号住居跡



1号竪穴状遺構・10号土坑



1号竪穴状遺構 調査風景



2号竪穴状遺構



3号竪穴状遺構



竪穴状遺構の調査 その 1



竪穴状遺構の調査 その 2



1号土坑



2号土坑



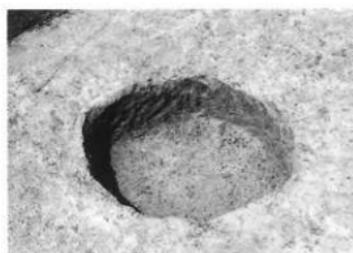
3号土坑



4号土坑



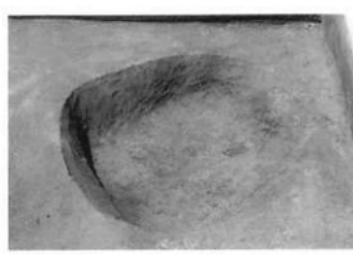
5号土坑



6号土坑



8号土坑



16号土坑

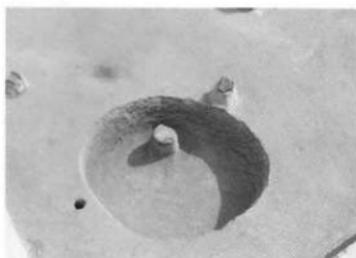
写真図版 8



17・18号土坑



17号土坑 遺物検出状況



19号土坑



土坑の調査



4号溝状遺構



14号土坑・5号溝状遺構



15号土坑・6号溝状遺構



溝状遺構の調査

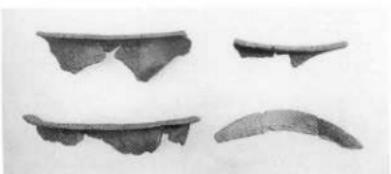


埋納遺構

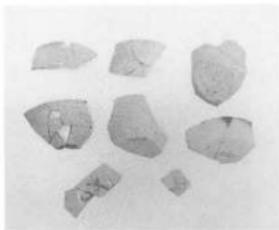


埋納遺構 完掘状況

写真図版10



1号住居跡 出土遺物 その1



1号住居跡 出土遺物 その2



2号住居跡 出土遺物 その1



3号住居跡 出土遺物



2号住居跡 出土遺物 その2



5号住居跡 出土遺物



7号住居跡 出土遺物 その1



6号住居跡 出土遺物 その1



6号住居跡 出土遺物 その2

7号住居跡 出土遺物 その2



8号住居跡 出土遺物 その1



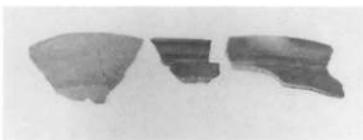
8号住居跡 出土遺物 その2



8号住居跡 出土遺物 その4



8号住居跡 出土遺物 その3



8号住居跡 出土遺物 その7



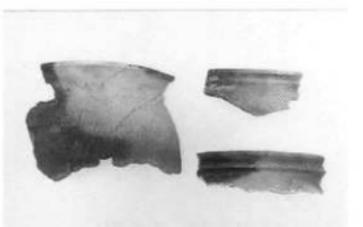
8号住居跡 出土遺物 その5



9号住居跡 出土遺物



8号住居跡 出土遺物 その6



10号住居跡 出土遺物



11号住居跡 出土遺物 その1

写真図版12



11号住居跡 出土遺物 その3



11号住居跡 出土遺物 その2



12号住居跡 出土遺物



14号住居跡 出土遺物 その1



15号住居跡 出土遺物



14号住居跡 出土遺物 その2



17号住居跡 出土遺物



3号竪穴状遺構 出土遺物



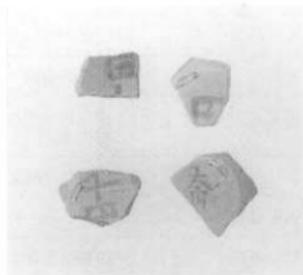
17号土坑 出土遺物



4号溝状遺構 出土遺物



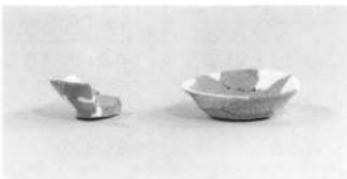
埋納遺構 出土遺物



遺構外出土 墨書



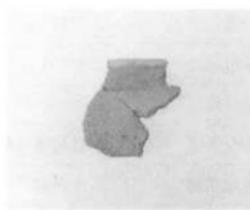
遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土遺物



遺構外出土 石器類

報告書抄録

ふりがな	ごたんだいせき
書名	五反田遺跡
副題	塩山東バイパス（国道411号）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第194集
編集者名	吉岡弘樹・齊藤伸
発行者名	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
住所・電話	〒400-0015山梨県東八代郡中道町下曾根923 TEL 055-266-3016
印刷日・発行日	平成14年3月15日・平成14年3月25日

遺跡概要

遺跡名	五反田遺跡
所在地	山梨県塩山市熊野439 他
地形図	25,000分の1 塩山
位置	北緯35° 41' 35" 東経138° 46' 00"
市町村コード	19203
古墳時代	
主な遺構	住居跡6軒・竪穴状造構3基
主な遺物	土師器
奈良・平安時代	
主な遺構	住居跡11軒
主な遺物	土師器
調査期間	平成12年5月29日～10月6日・平成13年6月11日～8月10日

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第194集

五反田遺跡

塩山東バイパス（国道411号）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日 平成14年3月15日
 発行日 平成14年3月25日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会・山梨県土木部
 印刷 (株)峠南堂印刷所

